3：考察

第１章では『儀式について』を中心に、教会堂における皇帝の儀礼について整理した。その結果、９世紀後半から１０世紀前半にかけて、市内の教会を舞台とする儀礼は減少ないし簡略化される傾向にあり、逆に宮殿内でのそれは繰り返し整備されていくことがわかった。またこれと関連して、市内の教会間を移動する行進は回数が減少していくにもかかわらず、宮殿内では、どんなに控えめに見ても儀礼上の重要な要素として生き残っており、見方によっては増加しているとさえ考えることができる。

また市内の教会においては多くの場合、行進とそれに続く入場の後で皇帝はギャラリーに用意された専用の空間を使用する。またいかなる場合も入場、領聖以外には儀式の進行に関与しない。これに対して、唯一例外としてあげられるのがハギア・ソフィアで、この教会においてのみ皇帝は側廊の自分用の空間を使用し、儀式の進行に積極的に関与する。ただしハギア・ソフィアにおいても、他の教会から行進して入場した場合はギャラリーを使用することから、皇帝の儀式への積極的な関与は、教会堂の性格よりも祭日の性格に起因するところが大きいように思われる。言葉を補って言えば、「ハギア・ソフィアだから」なのではなく、「重要な祭日だから」なのであって、ハギア・ソフィアの意義は逆に、皇帝が積極的に関与するような重要な祭日は常にこの教会が舞台となる点にある。

第２章では『儀式について』などの記述から、教会堂における皇帝の様子が具体的にわかるものについて、その建築を沿革、形態などの面から分析した。ここでは９世紀以降新たに建設された教会堂は宮殿内に集中し、それらの多くが内接十字型平面の規模の小さな建築であったことが明らかになった。またこれと好対称をなすのが市内に位置する教会で、そのほとんどが６世紀以前に創建され、多くが６世紀に造営された建築で、バシレイオス１世によって修理、復元されている。

これらの様々な教会堂において、皇帝は多くの場合自分専用に用意された空間を使用する。この空間は古い教会堂では、多くの場合ギャラリーに設置されている。しかし新しい建築においても、同様にこういった設備が用意されている。

これら先行する各章で得た結果を比較検討し、整理すると以下の結果を得る。

１）古い教会堂におけるギャラリーの使用

２）教会堂の形態や沿革とは無関係な皇帝専用空間の設置

３）宮殿内の儀式・建築に対する積極的な整備

４）ハギア・ソフィアの特異な位置付け

そこで続いて、これらの結果に関していくつかの考察を加えていきたい。

1）古い教会堂におけるギャラリーの使用

すでに繰り返し述べたように、皇帝が教会堂のギャラリーを使用するのは６世紀以前に建設された教会に限られることが、『儀式について』の記述からわかる。それも多くの場合、他の教会から行進して移動し教会堂内へ入場した後、ギャラリーへ行くという型式の次第、あるいはそれの簡略化されたものに則って使用される。

単にギャラリーということに注目して考えると、これは一見単純な問題なように思われる。なぜならば、内接十字型平面に代表される９世紀以降のビュザンツ教会堂は、多くの場合ギャラリーをもたず、あっても大変狭い場合が多い。それゆえに『儀式について』に登場する新しい教会堂が、ギャラリーを持っていたのか否か不明なものが多いが、単純にギャラリーが使用できなかったという可能性は高い。

ここで古い教会でありながら、側廊を使用することがわかっているストゥーディオス修道院に注目して見る。ストゥーディオス修道院の洗礼者教会は古い形式のバシリカ式教会であるが、皇帝は２階ギャラリーではなく南側廊のメータトーリオンを使用する。この教会で皇帝が儀式に参加するようになったのは、早くとも１０世紀始めのことである。ここで一つの可能性として、この教会で皇帝が礼拝に参加するようになった時期には、すでに先に述べた新しい平面型式の教会での儀礼が定型として確立し、皇帝は側廊の区切られた空間を使用するという型が、定着していたと考えることができるのではないだろうか。

仮にそうだとすると、逆にギャラリーを皇帝が使用するという根強い伝統が、新しい平面型式の教会がコンスタンティノポリスで一般的になる以前に、すでに確立していたことになるだろう。その理由は、古い型式の教会建築にみられるギャラリーが、儀式に参加するうえで決して便利な空間ではないことにある。概して６世紀以前の教会堂のギャラリーは幅が広く、身廊でおこなわれていることをみることができるのは、ギャラリーの端に位置することのできた人間のみである。またすでにみてきたように、ギャラリーに上る階段はナルテックスと連絡している場合が多く、『儀式について』で一つの類型として登場する、小聖入に参加し祭壇に献納をおこなった後ギャラリーへ上るのには、一旦、教会堂から外に出なければならない。

マシューズやシュトゥルーベはこのような６世紀ないしそれ以前の教会建築におけるギャラリーの特質を踏まえて、６世紀においてはギャラリーは洗礼志願者の使用する空間で、皇帝は側廊の区切られた空間を使用した、と考えている[766]。彼等の主張するようにギャラリーが洗礼志願者のための空間だとすると、後に洗礼志願者が減少しギャラリーが本来の機能を失った段階で、皇帝や廷臣達がギャラリーを専用の空間として使用するようになった可能性が、指摘できるのではないか。これと平行して、ハギア・ソフィアのギャラリーなどは総主教宮の一部として使用されるようになった。

この歴史的展開過程が妥当か否かはわきにおくとしても、正統信仰の祝日の次第が、側廊を使用するものからギャラリーを使用するものに変えられたことからも、皇帝が行進と共に入場した後、ギャラリーを使用することは、すでに一つの定型として確立していたものと思われる。

このことを、大宮殿内における新しい儀礼の存在と合わせて考えると、『儀式について』で記録されている様々な宗教儀礼の次第は、正確な成立年代は不明ではあるが、いくつかの異なる時代に生まれたものであることがわかる。

ギャラリーの使用に再び目を転じると、以下の事実は大変重要である。聖モーキオスなどでは、ギャラリーに皇帝と総主教のための食卓が用意されていた。ハギア・ソフィアの南ギャラリーは障壁によって分割されている。ハギオイ・セルギオス・カイ・バッコスのギャラリーは、教会堂が修道院に属するものであるから別に考えるとしても、ベーゲーの聖母教会などでかなりの数の皇帝用の空間が設置されていた。

ここでこれらの教会を皇帝が訪問する日が、みな重要な祭日であることを考え合わせると、ギャラリーは当時、一般の信徒達によってはほとんど使用されなかったと結論付けることができるだろう。

2）教会堂の形態や沿革とは無関係な皇帝専用空間の設置

第２章でみたように『儀式について』の記述からは、皇帝が礼拝に参加する場合、教会堂の形式には無関係に皇帝用の空間が用意されていることがわかる。これはバシリカ式平面の規模の大きな教会堂でも、内接十字型平面の規模の小さい教会堂でも等しく指摘することのできる点である。

従来、６世紀以前に主流であったバシリカ式平面の比較的規模の大きな教会堂が、内接十字型平面の規模の小さな教会堂へとってかわられた背景として、小人数による私的礼拝が主流となったことがあげられてきた[767]。これと平行して教会堂中央のアプス両脇の部屋も小礼拝室として整備されたと考えられている[768]。これらの議論の背景には、内接十字型に代表される緊密な空間の方が、小人数の礼拝にはより適しているとの考えがある。

しかしながら『儀式について』の記述では、このようなかたちの教会、あるいは礼拝所の使用方法は確認できない。確かに『儀式について』に記述されないような、より私的なあるいは個人的な礼拝に、ネアやファロスの聖母教会といった大宮殿内の内接十字型平面の教会堂が使用されたのは間違いない。だがその際に、どのように教会が使用されたのかは不明である。

『儀式について』の記述のなかでとくに象徴的なのが、預言者エリアスの記念祭におけるネアの使われ方である。皇帝と総主教はネアの堂内に、おそらくアプスに隣接するように建設された預言者の礼拝所を

使用する。これは先に述べた、アプス両脇の小礼拝室の典型的な使用例である。しかしその後、皇帝は教会堂南側ナルテックスのプロセウカディオンから礼拝に参加するのである。

この様な教会建築の使用方は、ハギア・ソフィアに代表される古い巨大な教会と同じものである。皇帝は自分専用の空間に入ったまま、そこから儀式に参加する。重要な祭日にハギア・ソフィアにおいて、大聖入などに参加するという例外を別にすれば、多くの場合至聖所からは遠く隔たった場所からまるで観客のような位置関係で、儀式に参加するのである。これは先に述べた「緊密さを求めた」精神からは、あい反するものではないだろうか。

3）宮殿内の儀式・建築に対する積極的な整備

バシレイオス１世の生涯を記録した『バシレイオス１世伝』には、皇帝の業績として様々な造営活動が記録されている[769]。それをまとめると以下のようになる。

市内の教会のうち修理したものハギア・ソフィア、聖使徒教会、ペーゲーの聖母教会、カルコプラテイアの聖母教会など１５棟。同じく再建した教会は聖モーキオスの教会など８棟。そして新らたに建設した市内の教会は２棟である。

これに対して大宮殿内の建築物に関しては１２棟の工事が記録されており、すべて新築である。ネアなどの宗教施設が８棟、広間、食堂などが４棟という内訳になる。さらに加えて皇帝は三つの離宮を造営したことが言及されている。

つまりバシレイオス１世は、市内の教会に関しては修理、修復、再建などの手段で望み、新しく記念碑的な教会堂を建てようとはしていない。これはユスティニアノス１世などとは対称的な態度である。しかしながら彼は、大宮殿内においては積極的に造営活動にいそしみ、数多くの新しい建物を残している。

彼の造営活動の頂点ともいうべき作品は、ネアであるが[770]、このネア、すなわち「新教会」という名前自体、彼の意欲を端的にあらわしたものであろう[771]。そしてこの教会は大宮殿の最も奥まった部分、クリュソトリクリノスの東南に位置していた。

第２章ですでにみてきたように、このバシレイオス１世において顕著に現れている態度は、先行するミカエル３世、続くレオン６世などにおいても等しくみることができる。すなわち大宮殿内では積極的に新しい記念碑的作品を造営するが、宮殿外あるいは市内における建築活動は、非常に消極的である。

彼等のこの態度と平行関係にある現象は、儀式においてもみることができる。第１章でみたように、大宮殿内の儀式は新しい教会の建設に伴って変更されている。これらの儀式に関しては二つの可能性が考えられる。一つはかつて他の教会が舞台であったものが、新しい教会堂の建設の後に変更を受けたというもの。もう一つは新しい教会堂の建設に伴って、新しい儀式が誕生したというものである。前者の好例は皇帝の結婚式である。これはかつてはダフネー宮の聖ステファノス教会で行なわれたが、ファロスの聖母教会の建設後、舞台はファロスに移された。しかし多くの儀式の場合、その儀式の性格から考えて後者に属するように思われる。ネアの献堂記念祭が、その典型的な例であろう。おそらく聖デメトリオスや聖バシレイオスの記念日も同様に考えることができる。預言者エリアスと大天使ミカエルは、決め手を欠くが、バシレイオス１世がこの両者に対して特に信仰が深かったことと、どちらもこの皇帝が建設したネアが舞台となることから考えて、やはり後者に属するように考えたほうがよいようである。ただしこれら後者に属する儀式のうち、ネア献堂記念祭以外のものは、舞台となる教会が市内の教会から大宮殿内に移された可能性は否定できない。

いずれにせよ、大宮殿内で行なわれる儀式は、その起源が大宮殿内の他の儀式であるにせよ、市内の教会を用いるものであるにせよ、あるいはまったく新しく創造されたものであるにせよ、９世紀後半以降に新しく作られた、または作り直されたものである。ここで興味深いのは、これらの儀式がいずれも大宮殿内で完結する形の行進を伴っており、最低二つの教会での儀礼とその間を移動する行進という構成を持っていることである。

第１章で指摘したように、市内の宗教儀式においては、二つの教会間を移動する行進は、この時代において減少する傾向にあった。事実、『儀式について』とその数十年後の『テュピコン』とを比較しても、復活祭の次の日曜日や昇天祭などの重要な祭日の行進が消滅している。このような状況にあって、大宮殿内で完結するものであるにせよ、文字通り市内で行なわれる行進の縮小版ともいうべき次第を使用していることは、一見すると非常に不思議にみえることである。

しかしながら、『バシレイオス１世伝』の記述からは、聖モーキオスの教会とペーゲーの聖母教会が、当時使用に堪えない状態であったのをバシレイオス１世が修復したことがわかる。一方、『儀式について』ではこの二つの教会はそれぞれ重要な祭日に、皇帝の訪問を受けることが記されている。つまり少なくともこの二つの教会に関して、バシレイオス１世が修復工事を行なう以前は、皇帝が訪問し儀式に参加することはおろか、教会としての機能すら危機に瀕していたものと思われる。そう考えてくると蓋然性からいって、かつて聖モーキオスとペーゲーでおこなわれていた儀式が、他の教会（おそらくはハギア・ソフィア）に舞台を移されていたものを、バシレイオス１世が旧情に戻した可能性が高い。もしもそうだとすると、彼は教会堂のみならず宗教儀式も「修復」したことになる。そしてこの見方に立つならば、教会堂は儀式の「舞台」として修復されたことになる。

確かにこの時代にあって、行進を伴う儀式は減少する傾向にあったが、同時におそらくその壮麗さゆえに、特別に重要な理由がある場合は行進がおこなわれていた。このよい例として正統信仰の日があげられ

る。これはイコン破壊運動の敗北を記念してブラケルナイの聖母教会からハギア・ソフィアに聖体行列が行進をおこなったことに起源をもつ。また皇帝の戦勝記念の行進もまだかなりの頻度をもっておこなわれていた。言葉を変えていえば、儀式としての行進はまだ相応の権威を持っていたわけである。

だが宗教儀礼の一部として行進が重要視されていた５・６世紀と比較して、その性格は大きく変化していた。かつての行進は観客としての市民の存在を抜きにしては語れない。デーモスに代表される民衆は皇帝に、時には歓呼し時には不平を述べた。また宗教的には正統派の異端派への示威行為という性格もあった[772]。一方、９世紀、１０世紀には市民という観客はもう想定することが困難である。デーモスは『儀式について』の記述からも明らかなように、決められた台詞を唱える専門家で宮廷から給料を受け取っていた。また一部の研究者は、この時代におけるフォルムの利用者の減少を唱えている[773]。宗教的にもかつてのような性格は失われ、その意味では形骸化が進んでいた。行進という儀式の観客として想定できるのは、皇帝の廷臣達である。

この時代の宮廷儀式の性格は、カメロンが主張するように、主催者である皇帝が参加者である廷臣達に見せる儀式であり[774]、言い換えれば既存の秩序、権威、価値体系を廷臣達が尊重することの確認行為にすぎない。

この点から考えていくと、『儀式について』を中心とする史料が記録している宗教儀礼への皇帝の参加は、イコン破壊運動の終焉と同時に皇帝権力と教会権力とが再び和解し、かつて強調されてた二つの権力の相互依存関係、いわゆるビザンティン・ハーモニーが復活したことを確認する意味が濃厚である。それゆえにイサウリア朝時代より前の栄光の時代、おそらくはユスティニアノスの６世紀へ回帰することが、少なくとも当事者達にとって主観的な意図であったのではないだろうか。

そのあとを受けた簒奪者バシレイオス１世は、自分が暗殺した先代のミカエル３世が見た以上の意味を儀式に見たことであろう。地方の貧農の出である彼にとって、宮廷儀礼は自分自身を権威付ける格好の道具であったに違いない。それゆえに彼は、先に述べたように古い儀式をさらに「修復」し、由緒正しく古い伝統と格式を誇る教会であれば、奉られている対象を問わず使用したのではないだろうか。これは当時、宮廷を中心にユスティニアノス１世やそれ以前の時代を指向した文化活動が、盛んにおこなわれていたことと関連するものであろう[775]。

しかし先に述べたように、都市空間の行進を中心とする古いかたちの宗教儀式のありかたは、長い目で見れば衰退する方向にあり、この流れは皇帝の力で変えられるものではなかった。また彼等が求めたものは、いうなれば動的な社会における静的な象徴装置としての宮廷儀礼だったわけで、そのためには市内を練り歩くことが必ずしも重要ではなかった。ここでバシレイオス１世以降の儀礼、聖コンスタンティノスの記念祭や万聖人の祭日、それに大宮殿内で完結する祭日をみてみると、みなかつての大掛かりな儀礼の

縮小版としての性格を持っていることに気がつく。

かつて例えば６世紀にあっては、聖体行列が教会間を行き来することによって都市空間の聖域化がおこなわれた。この時代はまだ、デーモスの例からもわかるように都市が政治的装置として機能しており、これをいかに制御下におくかが支配者の重要課題だったはずである。だが時代が下り都市機能が衰退するとともに、そのような課題は重要視されなくなった。

都市空間から宮殿内などの限定された空間に儀式の舞台を移すことは、宮殿の聖域化へとつながり、皇帝にとって儀式の私物化を意味する。これはある意味で、先に述べた私的礼拝の増加へと礼拝形態が変化したことや、当時の文学作品にみられる、社会から距離をおき個人の私的生活の中に閉じこもろうとする傾向[776]と合致しているように思われる。しかし一方で、その儀礼の核となる要素が伝統的な行進である点に、当時の宮廷儀礼の、さらにいえば宮廷文化自体の持つ私的傾向と古典指向という、あい入れることのない矛盾が垣間みられる。あるいは見方をかえていえば、この二つの相いれない方向性の妥協のうえに成立したのが、宮殿内を舞台とする新しい儀礼であろう。

4）ハギア・ソフィアの特異な位置付け

皇帝が参加する宗教儀礼の中で、ある意味で例外的な位置にあるのがハギア・ソフィアである。例えば、ハギア・ソフィアでの宗教儀礼に皇帝が参加する回数は、最重要なものだけでも年５回、祭日の中心となる儀式としては年７回を数える。これは他の教会を大きく上回るものである。さらに生誕祭、復活祭など、年中行事のうちで最も重要な祭日は、みな舞台がハギア・ソフィアとなる。さらに皇帝が小聖入、大聖入、平和の接吻のすべてに参加し、至聖所で領聖を受けるのもハギア・ソフィアだけである。

確かにハギア・ソフィアはコンスタンティノポリスの総主教座教会であり、大宮殿に隣接して建っており、当時の文献史料においても帝国を代表する建築物であった。しかしすでにみてきたように、その雄大な空間は緊密さからは程遠い。この点に関しては当時の好みには、あわなかった建築ではないのだろうか。例えばこの教会を訪れた者は、現代でも皆、アプス半ドームの聖母子像の小ささに違和感を覚えるのではないだろうか。

またさらに多くの研究者はこの時代の新しい傾向として、建築物の外観に対する意識の変化をあげている[777]。以前は西側正面の立面以外注意が払われなかったものが、教会堂が中庭などに孤立して配置されるようになり、外観全体にも意匠的な関心が払われるようになったというのが、それである。

ところがハギア・ソフィアにはすでにみてきたように、本堂以外にも神聖な井戸を納めた堂や聖ニコラオス、スケウオフュラキオン、ホーロロギオンなどの施設が混然一体と周囲に建っていた。同様の傾向は

他の教会においてもみられ、聖使徒教会ではおそらく状況はもっと混沌としており、コンスタンティノスの霊廟以下の霊廟建築や、万聖人の教会以下の教会および礼拝所を載せた名前の一覧は、ボーヌス宮に至るまで膨大な量に及ぶ。カルコプラテイアとブラケルナイの二つの聖母教会も、それぞれにソロスを始めとする複合施設を従えている。

こういったより古くより規模の大きな教会建築のありかたは、独立して聳え立つ記念碑的建築という我々が慣れ親しんだ観念が、この時代にあっては単なる幻想にしか過ぎないことを示すものである。それはまさに小都市の中心であり景観の一部としての建築である。

これに対して例えばネアはテラスに独立して建つ、端正な工芸品的美しさを持った建築ということができるだろう。同様の傾向は残念ながら装飾は失われてしまったが、920年前後に建設されたミュレライオン修道院の教会堂[778]にもみることができる。

ネアがバシレイオス１世が最も力を入れた建築であることを考えれば、ハギア・ソフィアが様々な側面からみて、同時代人にとって異質な存在であったことは間違いない。しかし第１章の『儀式について』と『テュピコン』の記述の比較でみたように、他の教会でおこなわれていた儀式は次々とハギア・ソフィアに、その舞台を移していくのである。

ここでマケドニア朝の歴代皇帝が宮殿内の教会建築と宗教儀礼とを積極的に整備したという事実と、大宮殿とハギア・ソフィアが、カルケー、アウグスタイオン、マンナウラの通路といった皇帝専用の動線によって連絡されていたことを考えあわせるならば、この教会が大宮殿に半ば取り込まれた存在であったことが想像できる。このことを、「大教会」と呼ばれるハギア・ソフィアが、コンスタンティノポリスの総主教座教会であり首都の宗教活動の中心であり、そして同時にこの都のみならず帝国を象徴する建築である[779]という事実と並置したときに、この建築物が皇帝、教会、市民のあいだの微妙な空間に建っているという事実が明らかになるであろう。

註

０：はじめに

[1] 井上浩一『ビュザンツ帝国』11-13. R.Jenkins, *Byzantium, The Imperial Centuries AD 610-1071*, 1966, reprinted Toronto, 1987. xi-. P.Schreiner, *Byzanz, Oldenbourg Grundriss der Geschichte 22*, 2.Auflage, 1994, München. 7-.

[2] コンスタンティノス８世の二人の娘ゾエとテオドラが宮廷を動かした時代も含め、1056年までとする説もある。P.Schreiner,op.cit.17.

[3] この時代の文化活動は復古的性格が濃厚で、かつて美術史の分野を中心に「マケドニア朝ルネッサンス」との位置付けがなされたが、近年ではその創造よりも収集に重点をおいた性格から「百科事典主義」と定義される様になった。A.Kazhdan, "Encyclopedism",ODB.696-97. Idem."Renaissance", ODB.1783-84.

[4] レオン６世は「バシリカ」と呼ばれる６０巻からなる法大全、首都の商工業についてまとめた『総督の書』、軍事行動の要諦を記した「タクティカ」などで知られる。多くの研究者はフィオテロスの『宴会席次論』も彼の文化活動の一環として書かれたとみている。コンスタンティノス７世は『帝国統治論』、『テマ制について』、『儀式について』などで知られる。

[5] Krautheimer,ECBA.331-. Mango,BA.108-.

[6] この町には４世紀から１５世紀までの間に、のべ６００以上の宗教施設があったが、そのうちの約半数がこの時代に建設されたものである。(Krautheimer,ECBA.334.) また現存する遺構に限ってみても、教会堂が建築物として残っている場合で１８棟中１０棟が、また基礎の発掘といった程度のものを含めると３３棟中１６棟がこの時代に属するものである。そしてこれらの遺構の中にはバシリカ式ないしその派生形に分類される平面計画をもつ教会堂は一つもない。(Müller-Wiener,Bildlexikon. 72-.)

[7] 在位829-42。彼の造営活動は宮殿建築に限られていた。詳細は『続テオファネス年代記』に詳しい。(Mango,Art.160-.)

[8] V.Ruggieri, *Byzantine Religious Architecture (582-867): Its History and Structural Elements*, OCA 237, Roma, 1991.

[9] R.Ousterhout, "An Apologia for Byzantine Architecture", Gesta, 35 (1996), 21-33.

[10] Κωνσταντινου τοῦ φιλοχρίστου καὶ ἐν αὐτῷ τῷ Χριστῷ τῷ αἰωνίῳ βασιλεῖ βασιλέως υἱοῦ Λέοντος τοῦ σοφωτάτου καὶ ἀειμνήστου βασιλέως σύνταγμά τι καὶ βασιλείου σπουδῆς ὄντως ἄξιον ποίημα

[11] C.Mango and I.Sevcenko, "a New Manuscript of the De ceremoniis", DOP14 (1960), 247-249.

[12] M.McCormick,"De ceremoniis",ODB.595-597.

[13] Vogt.De cer.I.vii. note 1.

[14] J.J.Reiske, *Constantini Porphyrogeniti imperatoris De ceremoniis aulae byzantinae*, 2 Vols. Bonn, 1829-1830.

[15] A.Vogt, *Le livre des cérémonies*, 4 Vols, Paris, 1935-36, reprinted Paris, 1967

[16] J.B.Bury,"The Ceremonial Book of Constantine Porphyrogennetos", The English Historical Review 22 (1907), pp. 209-27,417-39.

[17] A.Cameron,"The construction of court ritural: the Byzantine *Book of Ceremonies*", in ed.D.Cannadine + S.Price, *Riturals of Royalty - Power and*

Ceremonial in Traditional Societies -, 106-36. Cambridge. 1987.

[18] Ἔκθεσις τῆς βασιλείου τάξεως

[19] De ceremoniis aulae byzantinae

[20] De ceremoniis このほか英語やフランス語では『儀式の書』と呼ばれることも多い。(The Book of Ceremonies/ Le livre des cérémonies)

[21] Vogt, de cer. I. commnt. xxiii-xxiv.

[22] Bury,op.cit.210.,Reiske, de cer.II.516.

[23] Bury,op.cit.209-27.なお分類の記号は新たにつけなおした。

[24] Bury,op.cit.417-39.

[25] ὅσα δεῖ παραφυλάττειν . . .

[26] ἄκτα . . .

[27] acclamation

[28] Reiske, de cer.I.5.Vogt,de cer.I.3.

[29] Reiske, de cer.I.22.Vogt,de cer.I.17.

[30] Reiske, de cer.I.22-26.Vogt,de cer.I.17-20.

[31] Reiske, de cer.I.26-33.Vogt,de cer.I.20-26.

[32] Reiske, de cer.I.33.Vogt,de cer.I.26.

[33] Reiske, de cer.I.33-35.Vogt,de cer.I.26-28.

[34] Reiske, de cer.I.61.Vogt,de cer.I.56.

[35] Bury,loc.cit.

[36] デスポタイ (δεσπόται)

[37] バシレウス (βασιλέυς)

[38] ὁ μέγας βασιλέυς · ὁ μικρός

[39] ὁ μέγας βασιλέυς · οἱ μικροί

[40] Reiske, de cer. II. 533. 538.

[41] Reiske, de cer. II. 532.

[42] Janin, CB. 128-129.

[43] Reiske, de cer. II. 535.

[44] Philotheos, *Kletorologion* この史料に関する研究としては以下のものが重要である。J.B.Bury, *The Imperial Administrative System in the Ninth Century*, London, 1911. N.Oikonomides, *Les listes de preseance byzantines des IXe et Xe siecles*, Paris, 1972. オイコノミデスの著作にはこの史料の仏語訳が載っているが、残念ながら筆者未見である。なおこの史料に関する概説としては以下のものを参考にした。井上、ビザンツ121-、A.Kazhdan, "Philotheos, Kletorologion of", ODB.1661-62.

[45] これは第２巻第５２章から第５４章にあたる。Reiske,de cer. II.702-98.

[46] *Le typicon de la grande eglise*, 2vols, ed.J.Mateos, Roma, 1962-63.

[47] R.F.Taft+A.Kazhdan,"Typikon of the Great Church", ODB. 2132-33.

[48] Taft,Great.XXXIV-.

[49] *Synaxarium ecclesiae constantinopolitanae*, ed.H.Delehaye, Propylaem ad Acta Sanctorum novembris, Brussels, 1902.

[50] *Il Menologio di Basilio II*, 2vols, Turin, 1907.

[51] E.M. Antoniades, Ἐκφράσις τῆς Ἁγίας Σοφίας, 3vols. Athen-Leipzig, 1908.

[52] J.Ebersolt, *Saint Sophie de Constantinople, Étude de topographie d'après les Cérémonies*, Paris, 1910.

[53] J.Ebersolt, *Le Grand Palais de Constantinople et le Livre de Cérémonies*, Paris, 1910.

[54] C.Mango, *The Brazen House: a Study of the Vestibule of the Imperial Palace of Constantinople*, København, 1959.

[55] R.Guilland, *Études de topographie de Constantinople Byzantine*, 2vols. Amsterdam, 1969

[56] T.F.Mathews, *The Early Churches of Constantinople: Architecture and Liturgy*, University Park and London,1971.

[57] Ch.Strube, *Die westliche Eingangsseite der Kirchen von Konstantinopel in justinianischer Zeit*, Wiesbaen,1973.

[58] F.E.Brightman, *Liturgies Eastern and Western, vol.1, Eastern Liturgies*, Oxford, 1896.

[59] H.-J.Schulz, *Die byzantinische Liturgie*, Trier, 1980.

[60] J.Mateos, *La célébration de la parole dans la liturgie byzantine*, OCA 191, Roma, 1971.

[61] R.F.Taft, *The Great Entrance,A History of the Transfer of Gifts and other Preanaphoral Rites of the Liturgy of St. John Chrysostom*, OCA 200, Roma, 1978.

[62] J.F.Baldovin, *The Urban Character of Christian Worship*, OCA 228, Roma, 1987.

[63] O.Treitinger, *Die oströmische Kaiser-und Reichsidee nach ihrer Gestaltung im höfischen Zeremoniell*, Jena, 1938. reprinted Wiesbaden, 1956.

[64] M.McCormick, *Eternal Victory: Triumphal Rulership in Late Antiquity, Byzantium and the Early Medieval West*, Cambridge, 1986.

[65] J.P.Richter, *Quellen der byzantinischen Kunstgeschichte*, Wien, 1897.

[66] R.F.Taft, *The Great Entrance, A History of the Transfer of Gifts and other Preanaphoral Rites of the Liturgy of St. John Chrysostom*, OCA 200, Roma, 1978.

[67] A.M.Schneider, *Die Hagia Sophia zu Konstantinopel*, Berlin, 1939.
H.Kähler, *Hagia Sophia*, Berlin, 1967, transl. E.Child, New York, 1967.

[68] C.Mango, *The Brazen House: a Study of the Vestibule of the Imperial Palace of Constantinople*, København, 1959. R.Guilland, *Études de topographie de Constantinople Byzantine*, 2vols. Amsterdam, 1969. この主題に関しては以下の著作が有名であるが、本稿では筆者未見のため、のちの研究者の引用に頼った。J.Ebersolt, *Saint Sophie de Constantinople, Étude de topographie d'après les Cérémonies*, Paris, 1910. Idem. *Le Grand Palais de Constantinople et le Livre de Cérémonies*, Paris, 1910. E.B.Smith, *Architectural Symbolism of Imperial Rome and the Middle Age*, Princeton, 1956.

[69] T.F.Mathews, *The Early Churches of Constantinople: Architecture and Liturgy*, University Park and London, 1971.

[70] Ch.Strube, *Die westliche Eingangsseite der Kirchen von Konstantinopel in justinianischer Zeit*, Wiesbaen, 1973.

[71] Mango,Byzantium.234-.

[72] ναός

[73] Mathews,Early Churches.117-125. S.Curcic,"Naos",ODB.1436.

[74] .....ἀπὸ δὲ τῶν ἐκεῖσε εἰσέρχεται ἐν τῷ σεπτῷ <u>ναῷ</u> τοῦ ἁγίου μάρτυρος Μωκίου. Reiske,de cer.I.100. Vogt,de cer.I.93.

[75] .....εἰσέρχεται εἰς τὸν κοιτῶνα τῆς Δάφνης, πλησίον τοῦ <u>ναοῦ</u> τοῦ Ἁγίου Στεφάνου,..... Reiske,de cer.I.141. Vogt,de cer.I.131.

[76] Καὶ διέρχονται ἀμφότεροι ὅ τε βασιλεὺς καὶ ὁ πατριάρχης διὰ τοῦ ἀριστεροῦ μέρους τοῦ ναοῦ, ἤγουν τοῦ γυναικίτου,..... Reiske,de cer.I.78. Vogt,de cer.I.69-70.

[77] .....εἰσέρχεται μέσιν διὰ τοῦ ναοῦ, καὶ διὰ τῆς πλαγίας τοῦ ἄμβωνος καὶ τῆς σωλαίας διελθών, ἵσταται ἐνώπιον τῶν ἁγίων θυρῶν,..... Reiske,de cer.I.123. Vogt,de cer.133.

[78] .....εἰσέρχεται εἰς τὴν ἐκκλησίαν, καὶ διελθὼν διὰ τῆς σωλαίας, ἵσταται ἔμπροσθεν τῶν ἁγίων θυρῶν,..... Reiske,de cer.I.146. Vogt,de cer.135.

[79] M.J.Johnson,"Bema",ODB.281.

[80] θυσιαστήριον

[81] βῆμα

[82] ἱερατεῖον （聖職者の場所）あるいは πρεσβυτέριον（長老の場所）が一般的で、特に前者は単語帳的一対一対応の用語解説では必ず登場する。

[83] ἡ ἁγία τραπέζη

[84] Mathews,Early Churches.122-23.

[85] γυναικίτης

[86] κατηχουμένια

[87] Prokopios,de aedif.I.i.56.

[88] 本稿においては触れなかったが、実際に女性と志願者が堂内の何処に位置したのかに関しては、各研究者の間で未だに意見の一致を見ない。 Krautheimer,ECBA. 218. Mathews,Early Churches.125-34. Strube,Eingangsseite.87-96. Mainstone,Hagia Sophia.230.

[89] Strube,Eingangsseite.92-93.

[90] Mathews,Early Churches.132.

[91] Mathews,Early Churches.128-29. Strube,Eingangsseite.92-95.

[92] μητατώριον (μητατωρικίον) この空間は以下の教会で言及される。ハギア・ソフィア、カルコプラテイア、ブラケルナイ（ソロス）、ペーゲー、ハギオイ・セルギオス・カイ・バッコス、ストゥーディオス。

[93] παρακυπτικόν (παρακυμπτικόν) この空間が言及されるのは以下の教会である。ハギア・ソフィア、ブラケルナイ（ソロス）、ハギオイ・セルギオス・カイ・バッコス、ハギオス・モーキオス。

[94] εὐκτηρίον ハギア・ソフィア、ブラケルナイの聖母教会の本堂と、ハギオイ・セルギオス・カイ・バッコスなどでこの空間が言及される。

[95] κοιτών ブラケルナイ、ペーゲーにあることが記述からわかる。

[96] προσευχαδίον これが言及されるのはネアのみである。

[97] τετρασέρον ハギオス・デメトリオスとハギオス・パンテレエモンで登場する。

[98] 例えば万聖人の祝日の聖使徒教会における儀式に関する記述で「皇后聖テオファノの礼拝所へ・・・」とある。 .....εἰς τὸ εὐκτηρίον τῆς ἁγίας καὶ βασιλίδος Θεοφανοῦς. Reiske,de cer.II.537.

[99] 第1巻第1章にダフネー宮で皇帝が一連の教会を巡る際に以下の記述がある。「隣にある聖三位一体の礼拝所に・・・」 .....ἐν τῷ κατεκείνῳ ἤτοι μετεκείνῳ εὐτεηρίῳ τῆς Ἁγίας Τριάδος,..... Reiske,de cer.I.8. Vogt,de cer.I.5.

[100] Strube,Eingangsseite.79-81.

[101] この単語の複数形はヒッポドロモスの貴賓席のロッジに対して使用される。Strube,Eingangsseite.81-86.

[102] 両者とも「祈る、願う、誓う」を意味するエウコマイ (εὔχομαι) から派生したと思われる。

[103] Vogt,de cer.I.Commt.141.

[104] Guilland,Topographie.I.313.

[105] Mango,Art.161.note 54.

[106] ブラベイオン(βραβεῖον)のこと。これは具体的には、例えば象牙版に刻まれた叙任証（パトリキオス）や黄金の柄の剣（スパタリオス）のように、各称号を象徴する品物を指している。またこのような

「物」によって任命されるため、「物による位階」と呼ばれる。
井上、ビザンツ123-24、A.Kazhdan,"Brabeion",ODB.319.

[107] たとえば役所の各部局長はプロートスパタリオス以上の称号をもっていることが必要であった。
井上、loc.cit. A.Kazhdan,"Dignities and Titles",ODB.623.

[108] 井上、loc.cit. A.Kazhdan,"Offices",ODB.1513.

[109] A.Kazhdan,"Domestikos",ODB.646.

[110] A.Kazhdan,"Demarchos",ODB.602-03.

[111] M.McCormick,"Demoi",ODB.608-09.Idem.,"Factions",ODB.773-74.

[112] A.M.Talbot+A.Kazhdan,"Hegoumenos",ODB.907-08.

[113] A.Kazhdan+P.Magdalino,"Referendarios",ODB.1778.

[114] A.Kazhdan,"Chartoularios",ODB.416.

[115] A.Kazhdan,"Kastresios",ODB.1111-12.

[116] A.Kazhdan,"Ostiarios",ODB.1540.

1：皇帝の参加する宗教儀式

117) Mateos,Typicon. II. 298.
118) R.F.Taft+A.W.Carr,"Birth of the Virgin",ODB. 291.
119) Mateos,Typicon. I. 18-21.
120) Mateos,Typicon. I. 18.
121) Mateos,Typicon. I. 20.
122) Reiske, de cer. II. 781-82.
123) Reiske, de cer. I. 26-33. Vogt, de cer. I.20-26.
124) Reiske, de cer. I. 27-28. Vogt, de cer. I.22.
125) Reiske, de cer. I. 29-32. Vogt, de cer. I.23-25.
126) R.F.Taft+A.Kazhdan,"Cross, Cult of the", ODB. 551-53.
127) Vogt, de cer. I.commnt. 141-42.
128) Mateos,Typicon. I. 26-33.
129) Mateos,Typicon. I. 30.
130) Reiske, de cer. II. 782.
131) Reiske, de cer. I. 125-27. Vogt, de cer. I.116-18.
132) Mateos,Typicon. I.31.note3. R.F.Taft+A.Kazhdan,"Cross, Cult of the", ODB. 551.
133) Mateos,Typicon. I. 48-49.
134) Reiske, de cer. II. 562.
135) Janin,CB. 342-43. Janin,EM. 264-67.
136) Mateos,Typicon. I. 78-81.
137) Mateos,Typicon. I. 78.
138) Reiske, de cer. I. 123. Vogt, de cer. I.114.
139) Reiske, de cer. I. 124. Vogt, de cer. I.115.
140) Janin,EM.89-90.
141) Vogt, de cer. I.commnt. 137-38.
142) Mateos,Typicon. I. 82-83.
143) Janin,EM.399-400.
144) Mateos,Typicon. I. 86-87.
145) Reiske, de cer. II. 562.
146) Janin,CB. 319-20,334-35.
147) Janin,EM. 284-85.
148) Reiske, de cer. I. 121. Vogt, de cer. I.112.
149) ネア・バシリケー・エックレーシア：νέα βασιλική ἐκκλησία
150) Mateos,Typicon, I.94-97.
151) R.F.Taft+A.W.Carr.,"Presentation of the Virgin", ODB. 1715.
152) Synax.CP. 244.33-34.
153) Reiske, de cer. I. 187-91. Vogt, de cer. I.175-79.
154) Mateos,Typicon, I.110-11.
155) R.F.Taft+A.W.Carr.,"Nativity", ODB. 1441-42.
156) Mateos,Typicon, I.134-37.
157) Mateos,Typicon, I.144-55.
158) Mateos,Typicon, I.154-63.
159) Reiske, de cer, II. 741-54.

160) Reiske, de cer. I. 35-41. Vogt, de cer. I.29-34.
161) Reiske, de cer. I. 22. Vogt, de cer. I.17.
162) Reiske, de cer. I. 7-9. Vogt, de cer. I.5-6.
163) Reiske, de cer. I. 13. Vogt, de cer. I.9.
164) Reiske, de cer. I. 129. Vogt, de cer. I.119-20.
165) ἡ μικρά εἴσοδος
166) Mateos,parole.73ff.
167) R.F.Taft,"Little Entrance",ODB,1238-39.
168) Mateos,parole.71-73. ODB,loc.cit.
169) τὴν ἱεράν σύναξιν εἴσοδος
170) εἰς τὴν ἐκκλησίαν εἴσοδος
171) PG91,688-689.
172) St.Germanos of Constantinople, *On the Divine Liturgy*, Crestwood,N.Y., 1984, par.24
173) Reiske, de cer. I. 14-16. Vogt, de cer. I.10-12.
174) Reiske, de cer. I. 132-33. Vogt, de cer. I.122-23.
175) ἡ μεγάλη εἴσοδος
176) PG91,693C
177) Liturgy,par.37
178) R.F.Taft,"Great Entrance",ODB.868.
179) Reiske, de cer. I. 16-17. Vogt, de cer. I.12-13.
180) Reiske, de cer. I. 133-34. Vogt, de cer. I.123.
181) アガペー：ἀγάπη
182) アスパスモス：ἀσπασμός
183) Reiske, de cer. I. 17. Vogt, de cer. I.13.
184) Reiske, de cer. I. 134. Vogt, de cer. I.123-24.
185) R.F.Taft,"Communion",ODB.491.
186) Reiske, de cer. I. 17-20. Vogt, de cer. I.13-14.
187) Reiske, de cer. I. 134-35. Vogt, de cer. I.124-25.
188) Mateos,Typicon. I. 170-71.
189) Reiske, de cer. I. 137. Vogt, de cer. I.127.
190) R.F.Taft+A.W.Carr,"Epiphany",ODB.715.
191) Mateos,Typicon. I. 172-73.
192) Mateos,Typicon. I. 174-85.
193) Mateos,Typicon. I. 178.
194) ἐν τῇ φιάλῃ τοῦ λουτῆρος マテオスはこれを「洗礼堂の水盤」と訳し、この水が翌日の洗礼に使用されると考えている。これに対してシュトゥルーベは、通常この表現は「アトリウムの水盤」を差すことが一般的なことを指摘している。また彼女は他の史料において、この儀式は6世紀にはアトリウムでおこなわれた、との記述があることも述べている。(Strube,Eingangsseite.43 note 128. 60-61. note 209.)
195) Mateos,Typicon. I. 182.
196) Reiske, de cer. I. 140. Vogt, de cer. I.130.
197) Reiske, de cer. I. 140. Vogt, de cer. I.131.
198) Reiske, de cer. I. 141-42. Vogt, de cer. I.131-32.
199) 第2巻第8章や第55章の記述から、この教会には専属の聖職者達がいたことがわかる。
200) Mateos,Typicon. I. 184.

201) Mateos,Typicon. I. 184-89.
202) Mateos,Typicon. I. 188-91.
203) Reiske, de cer. I. 145-46. Vogt, de cer. I.134-35.
204) Reiske, de cer. I. 146-47. Vogt, de cer. I.135-36.
205) Reiske, de cer. II. 754-58.
206) ὑπαπαντή
207) R.F.Taft+A.W.Carr,"Hypapante",ODB.961.
208) Mateos,Typicon. I. 220-25.
209) Mateos,Typicon. I. 222.
210) Reiske, de cer. II. 759.
211) Reiske, de cer. I. 150-53. Vogt, de cer. I.138-41.
212) Reiske, de cer. II. 545-48.
213) Reiske, de cer. I. 156. Vogt, de cer. I.144.
214) A.Kazhdan+N.P.Sevcenko,"Forty Martyrs of Sebasteia",ODB.799- 800.
215) Reiske, de cer. II. 559.
216) Mateos,Typicon. I. 244-47.
217) Mateos,Typicon. I. 244.
218) Mango,Developpement. 30-31.
219) R.F.Taft+A.W.Carr,"Annunciation",ODB.106-07.
220) Mateos,Typicon. I. 252-55.
221) Mateos,Typicon. I. 252+254.
222) Reiske, de cer. II. 762.
223) Reiske, de cer. I. 33. Vogt, de cer. I.26.
224) Reiske, de cer. I. 162-70. Vogt, de cer. I.151-57.
225) Reiske, de cer. I. 161-62. Vogt, de cer. I.149-50.
226) Reiske, de cer. I. 163-64. Vogt, de cer. I.152-53.
227) Reiske, de cer. I. 164-65. Vogt, de cer. I.153-54.
228) Janin,CB.379. Guilland,Topographie.32-34.
229) R.Naumann,"Vorbericht über die Ausgrabungen zwischen Mese und Antiochus-Palast 1964 in Istanbul", IM.15(1965),135-148.
230) Bildlexikon,238.
231) Reiske, de cer. I. 165-67. Vogt, de cer. I.154-55.
232) Reiske, de cer. I. 168-69. Vogt, de cer. I.156-57.
233) Reiske, de cer. I. 169-70. Vogt, de cer. I.157.
234) Mateos,Typicon. I. 256-59.
235) Reiske, de cer. I. 85. Vogt, de cer. I.76-77.
236) Reiske, de cer. I. 75. Vogt, de cer. I.68.
237) Mango,Developpement,28.
238) Janin,CB.341-42. Janin,EM.174-75.
239) Janin,EM.361-364.
240) Reiske, de cer. II. 775-76..
241) Reiske, de cer. I. 118-121. Vogt, de cer. I.110-112.
242) Reiske, de cer. I. 120-121. Vogt, de cer. I.111-112.
243) Mateos,Typicon. I. 278-79.
244) Mateos,Typicon. I. 282-85.
245) Reiske, de cer. II. 776.

246) Mateos,Typicon. I. 296-97.
247) Janin,EM.295-297.
248) Janin,CB.128-29. 206-07.
249) Reiske, de cer. II. 532-35.
250) Reiske, de cer. II. 532-33.
251) Reiske, de cer. II. 534-35.
252) Mateos,Typicon. I. 328-29.
253) Reiske, de cer. II. 559-60.
254) Janin,CB.463.
255) A.M.Talbot,"Kosmas and Damianos Monastery",ODB.1151. Janin,EM. 286-89.
256) Guilland,Topographie.II.22.
257) Vogt, de cer. I. 174. note 1. Vogt,de cer. Comnt I. 174.
258) Reiske, de cer. I. 186-87. Vogt, de cer. I.174.
259) Mateos,Typicon. I. 346-47.
260) Janin,CB.407-08.
261) Janin,EM.137-38.
262) Reiske, de cer. II. 776-77.
263) Reiske, de cer. I. 114-18. Vogt, de cer. I.106-09.
264) Reiske, de cer. I. 114-15. Vogt, de cer. I.106-07.
265) Reiske, de cer. I. 117-18. Vogt, de cer. I.108-09.
266) Mateos,Typicon. I. 350-53.
267) ἀπομύρισμα
268) Reiske, de cer. II. 560-61.
269) Janin,CB.365-66.
270) Janin,CB.395-96.
271) Janin,EM.387-88.
272) Mateos,Typicon. I. 356-57.
273) Reiske, de cer. II. 538-41.
274) Reiske, de cer. II. 538-39.
275) G.Padskalsky,R.F.Taft+A.W.Carr,"Transfiguration",ODB.2104-05.
276) Mateos,Typicon. I. 360-63.
277) Reiske, de cer. II. 779.
278) Reiske, de cer. I. 22. Vogt, de cer. I.17.
279) R.F.Taft+A.W.Carr,"Dormition",ODB.651-653.
280) Mateos,Typicon. I. 368-73.
281) Janin,CB.407-08.
282) Janin,EM.127-29.
283) Reiske, de cer. II. 779-80.
284) Reiske, de cer. II. 541-44.
285) Reiske, de cer. II. 544.
286) Mateos,Typicon. I. 376-77.
287) Reiske, de cer. II. 780.
288) Mateos,Typicon. I. 386-87.
289) Mateos,Typicon. I. 386.
290) τὰ Σπαρακίου
291) τὰ Σφωρακίου

292) Janin, CB. 428.
293) Janin, EM. 440-441.
294) Reiske, de cer. II. 780.
295) Reiske, de cer. II. 562-63.
296) J.Irmscher,A.Kazhdan,R.F.Taft+A.W.Carr,"John the Buptist", ODB. 1068-69.
297) Janin, EM. 434-435.
298) A.Kazhdan,A.M.Talbot+A.Cutler,"Stoudios Monastery", ODB.1960- 61.
299) Janin,CB. 440-441. Mateos,Typicon. I. 387. note 3.
300) Reiske,de cer.II.760.
301) Mateos,Typicon.II.5.note 1.
302) Mateos,Typicon.II.323.
303) B.Croke,"Hour",ODB.II.953.
304) Reiske,de cer.II.547-48.
305) P.A.Hollingsworth,A.Kazhdan,A.Cutler,"Triumph of Orthodoxy", ODB. 2122-23.
306) Reiske,de cer.II.761.
307) Reiske,de cer.I.157-59. Vogt,de cer.I.145-47.
308) Reiske,de cer.I.159-60. Vogt,de cer.I.147-48.
309) Reiske,de cer.I.161. Vogt,de cer.I.149.
310) Reiske,de cer.II.549.
311) Mateos,Typicon.II.38-39.
312) Reiske,de cer.II.640.
313) R.F.Taft,"Palm Sunday",ODB.1566.
314) Mateos,Typicon.II.62-67.
315) Reiske,de cer.I.170-71. Vogt,de cer.I.158-59.
316) Reiske,de cer.I.172-77. Vogt,de cer.I.160-64.
317) Reiske,de cer.II.762-63..
318) Reiske,de cer.II.763.
319) Reiske,de cer.I.177-78. Vogt,de cer.I.165-66.
320) Reiske,de cer.II.763-64.
321) Reiske,de cer.I.178-80. Vogt,de cer.I.167-68.
322) Reiske,de cer.I.178-79. Vogt,de cer.I.167.
323) Mateos,Typicon.II.78-83.
324) Reiske,de cer.I.33-34. Vogt,de cer.I.27-28.
325) Reiske,de cer.I.181-83. Vogt,de cer.I.170-71.
326) Reiske,de cer.I.183-84. Vogt,de cer.I.171-72.
327) Reiske,de cer.II.764-65.
328) Mateos,Typicon.II.82-91.
329) Mateos,Typicon.II.84.
330) R.F.Taft,"Easter",ODB.670.
331) Reiske,de cer.I.22. Vogt,de cer.I.17.
332) Reiske,de cer.I.22-26. Vogt,de cer.I.17-20.
333) Reiske,de cer.I.61-71. Vogt,de cer.I.56-64.
334) アンティミシオン：ἀντιμισίον
335) Reiske,de cer.I.64-67. Vogt,de cer.I.58-61.
336) Reiske,de cer.I.67-68. Vogt,de cer.I.61-62.

337) Reiske,de cer.I.68-69. Vogt,de cer.I.62.
338) Reiske,de cer.II.765-69.
339) Mateos,Typicon.II.92-97.
340) Reiske,de cer.II.769.
341) Mateos,Typicon.II.96-99.
342) Reiske,de cer.I.71-86.Vogt,de cer.I.65-77.
343) Reiske,de cer.I.73-74.Vogt,de cer.I.67.
344) Reiske,de cer.I.74-75.Vogt,de cer.I.67-68.
345) Reiske,de cer.I.76-80.Vogt,de cer.I.68-72.
346) Reiske,de cer.I.47-52.Vogt,de cer.I.41-45.
347) Reiske,de cer.I.27.Vogt,de cer.I.22.
348) Reiske,de cer.I.164.Vogt,de cer.I.152.
349) Vogt,de cer.I.comnt.105.
350) Reiske,de cer.I.86-89.Vogt,de cer.I.78-81.
351) Reiske,de cer.I.87-89.Vogt,de cer.I.79-80.
352) Reiske,de cer.II.769.
353) Mateos,Typicon.II.100-01.
354) Reiske,de cer.I.91-96.Vogt,de cer.I.84-88.
355) Reiske,de cer.II.770-71.
356) Mateos,Typicon.II.102-05.
357) Reiske,de cer.I.53.Vogt,de cer.I.46-47.
358) Reiske,de cer.II.535+538.
359) Reiske,de cer.II.773.
360) Reiske,de cer.I.97-98.Vogt,de cer.I.90-91.
361) Mateos,Typicon.II.108-09.
362) Baldovin,Urban.199.
363) Reiske,de cer.II.774-75.
364) Reiske,de cer.I.98-108.Vogt,de cer.I.92-100.
365) loc.cit.
366) Reiske,de cer.I.53-54.Vogt,de cer.I.48-49.
367) Mateos,Typicon.II.120-21.
368) Vogt,de cer.I.comnt.87,127. Janin,EM.356. Baldovin,Urban.199.
369) R.F.Taft+A.W.Carr,"Ascension",ODB.203.
370) Reiske,de cer.II.774-75.
371) Reiske,de cer.I.108-14.Vogt,de cer.I.101-05.
372) Reiske,de cer.I.109-13.Vogt,de cer.I.102-05.
373) Reiske,de cer.I.54-58.Vogt,de cer.I.50-53.
374) Mateos,Typicon.II.126.
375) Mateos,Typicon.II.126-29.
376) Baldovin,Urban.199.
377) Janin,EM.225.
378) R.F.Taft+A.W.Carr,"Pentecost",ODB.1626-27.
379) Reiske,de cer.I.22.Vogt,de cer.I.17.
380) Reiske,de cer.I.58-61.Vogt,de cer.I.53-56.
381) Reiske,de cer.II.775.
382) Mateos,Typicon.II.136-39.

383) Janin,EM.47.

384) Mateos,Typicon.II.144-47.

385) Mateos,Typicon.II.144.

386) Reiske,de cer.II.535-38.

387) ライスケはこれを「万聖人」としているが、シュトゥルーベはこれを写本で使われている省略記号の読み違いで「聖使徒」が正しいとしている。そちらの方が文意も通るのでここではシュトゥルーベに従う。Strube,Eingangsseite.143. note 612.

388) loc.cit.

389) Baldovin,Urban.225-26.

390) Mateos,parole.89-90. Baldovin,loc.cit.

2：皇帝が使用する教会建築

391) Hagia Sophia(Megale Ekklesia):Ἁγία Σοφία (Ἡ Μεγάλη Ἐκκλησία)

392) Hagios Konstantinos en to phoro:Ἅγιος Κωνσταντῖνος ἐν τῷ φόρῳ

393) Hagioi Apostoloi:Ἅγιοι Ἀπόστολοι

394) Hagios Konstantinos en to palatiou tes Bonou:Ἅγιος Κωνσταντῖνος ἐν τῷ παλατιῷ τῆς Βῶνου

395) Theotokos ton Chalkoprateion:Θεοτόκος τῶν Χαλκοπρατείων

396) Theotokops ton Blachernon:Θεοτόκος τῶν Βλαχερνῶν

397) Mone tes Theotokou tes Peges:Μονὴ τῆς Θεοτόκος τῆς Πηγῆς

398) Hagioi Sergios kai Bacchos:Ἅγιοι Σεργίος καὶ Βάκχος (Μονὴ τῶν ἁγιῶν Σεργίου καὶ Βάκχου ἐν τοῖς Ὁρμίσδου)

399) Mone Hagiou Mokiou:Μονὴ ἁγίου Μωκίου

400) Hagios Panteleemon ta Narsou:Ἅγιος Παντελεήμων τὰ Ναρσοῦ

401) Mone tou Prodromou en tois Stoudiou:Μονὴ τοῦ Προδρόμου ἐν τοῖς Στουδίου

402) Theotokos tou Pharou:Θεοτόκος τοῦ Φάρου

403) He Nea Ekklesia:Ἡ Νέα Ἐκκλεσία

404) Hagios Demetrios tou Palatiou:Ἅγιος Δημήτριος τοῦ Παλατίου

405) Eukterion tou Hagiou Petrou en to Palatio:Εὐκτήριον τοῦ ἁγίου Πέτρου ἐν τῷ Παλατιῷ

406) Hagios Basileios en to Palatio:Ἅγιος Βασίλειος ἐν τῷ Παλατίῳ

407) Hagios Stephanos en te Daphne:Ἅγιος Στέφανος ἐν τῇ Δάφνῃ

408) Ayasofya Camii Müzesi.

409) Küçük Ayasofya Camii.

410) Imrahor Camii.

411) Acem Aga Mescidi.

412) ハギア・ソフィアに言及している史料は枚挙に暇がないが、そのうち基本的なものは以下にみることができる。 Richter, Quellen.12-. Mango, Art.72-/187-. また先行研究も膨大な量が存在する。本論分で参考にした個別研究書のうち、主なものは以下のとおり。 Lethaby+Swainson, St. Sophia. Schneider, Hagia Sophia. Mango, Mosaics. Kähler, Hagia Sophia. Mainstone, Hagia Sophia. さらに以下の著作も重要な記述を含んでいる。 Krautheimer, ECBA. 205-. Mathews, Early Churches.88-. Strube, Eingangsseite.13-. Mango, BA.59-. そして実測図面としては Van Nice, St.Sophia. が現時点では最も信頼性にとむものである。

413) ここでは上記文献に加えて以下を参照した。 Müller-Wiener, Bildlexikon.84-. Janin. EM.455-. C.Mango, "Hagia Sophia", ODB. 892-.

414) 同様の分類は Strube,Eingangsseite.46-50. にもみることができる。

415) 皇帝の戴冠式に関してこの史料は以下のように説明している。「・・・そしてスコレーを通って教会（ハギア・ソフィア）に行く・・・ホーロロギオンへ入り、カーテンをあげメータトーリオンに入るとディベーテーシオンとツィツァキオンを着てその上にサギオンをつけて、総主教と共に入場するが、銀の門に蝋燭を灯し身廊に入る。そしてソレアに入り神聖な扉で祈る。そして蝋燭を灯すと総主教とアンボに上る。クラミュスの前で総主教は祈り、祈り終わるとクーブークリオンの者達がそれを取り上げ皇帝に着せる。そして再び総主教は冠のところで祈り、それがすむと総主教は自分で冠を取って皇帝の頭の上に載せる。そうすると人々はトリトンの歓声をあげる。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。天なる神には栄光を、地上には平和を。」そして「唯一の偉大な皇帝にして支配者よ、長い治世を。」等々。冠をつけて、下りメータトーリオンに入る。そして玉座に腰を下ろすと・・・（以下謁見の模様で終わる）」 Reiske,de cer.I.192-193. Vogt,de cer.II.1-2.

[416] コンスタンティノポリスの総主教の選挙についてこの史料の第２巻第１４章は以下の次第を説明している。まずハギア・ソフィアのギャラリーで聖職者達の会合が持たれ、次に宮殿内で皇帝への報告がある。そしてマンナウラで元老院への発表がおこなわれた後、皇帝は「この祭が日曜日におこなわれるときは、仕来りに従って大教会に行進し、・・・（中略）・・・そしていつもどおりの入場の型に従って、順番に行列を組み」(Reiske,de cer.II.565) 教会内に入るとなっている。そして選挙の後、皇帝は「ベーマの右の部分を通って、回り礼拝所に入る。ここには銀で飾られた十字架がある。そこで蝋燭を手に三回御辞儀をして神への感謝を表すと、府主教に暇乞いをする。もしも聖霊降臨祭の大日曜日や他の、皇帝が大教会に来るような祭の時は、(側廊の) メータトーリオンに入り、続いて他の行進をおこなう。もしも皇帝が大教会に来ないような祭、普通の日曜日の時は神聖な井戸の所に向いた階段を通って、ギャラリーの東に向かって右の部分に上り、神聖な福音書の朗読を待つ。」(ibid. 565- 566.) このことから総主教の選出の際には、皇帝は通常の小聖入の手続きに従って入場し、その後は当日が本来どのような祭日であるかに従うことがわかる。しかし総主教の選出の記録として同第３８章に残されている、総主教テオフュラクトスの選挙の模様は以下のようである。マンナウラでの儀式の後、皇帝達は「通路（ディアバティコン）を通って、大教会のギャラリーに進み、仕来りに従って蝋燭を手に三回御辞儀をして神への感謝を表し」(Reiske,de cer.II.635-36.)着替えて待つ。そして「決まり通りに皇帝達は大階段を下り、最も神聖な教会のナルテックスに繁栄の扉から入った。選ばれた者はすべての位の教会関係者と共に彼等を出迎えた。そしていつもどおりの入場の型に従って、順番に行列を組み・・・」となっており、第１４章でいう「仕来り」に従った「行進」がホーロロギオンを通るものではなく、ギャラリーへ直接向かうものであることがわかる。それゆえにこの総主教の選挙の入場は、ギャラリーのメータトーリオンに一旦入って物事を調整した後に入場をおこなうことになる。ちなみにテオフュラクトスの選出は933年２月２日におこなわれた。この日は進堂祭で本来プラケルナイで儀式がおこなわれる日である。それゆえにこの日は第１４章の「皇帝が大教会に来ないような祭」に該当する。そして事実、第３８章の記述は選挙の後に皇帝が「ベーマの右の部分を通って、回り礼拝所に入った。ここには銀で飾られた十字架がある。そこで蝋燭を手に三回御辞儀をして神への感謝を表すと、府主教に暇乞いをして、神聖な井戸の所に向いた階段を通って、ギャラリーの東に向かって右の部分に上り、神聖な福音書の朗読を待った」(Reiske,de cer.II.636.) ことを伝えている。

[417] Reiske,de cer.I.98.Vogt,de cer.I.90-91.

[418] 前章で触れたように、このハギア・ソフィアでの儀式は受胎告知の祭日に属するもので四旬節第三週日曜日に属するものではない。『儀式について』には明確な記述はないが、受胎告知の日が他の祭日と重ならない場合でも、ハギア・ソフィアでの礼拝に皇帝は参加したものと思われる。

[419] 先の受胎告知の場合とは異なり、前章で述べたようにこの日のハギア・ソフィアでの儀式は四旬節第一週月曜日に属するもので、本来進堂祭とは無関係である。

[420] Reiske,de cer.I.186.Vogt,de cer.I.174.

[421] Lethaby+Swainson,St.Sophia.182.

[422] Schneider,Hagia Sophia.46.Anm.13.

[423] A.M.Talbot,"Horologion",ODB.947.

[424] J.Ebersolt, Ste Sophie. Antoniades, Hagia Sophia. Schneider, Hagia Sophia.36.

[425] F.Dirimtekin,"Le local du Patriarcat à Sainte Sophie",IM 13/14 (1963/64), 113-127.

[426] Richter, Quellen.30.

[427] Strube,Eingangsseite.67. Mainstone,Hagia Sophia.122.

[428] Cormack+Hawkins,Southwest Rooms.197.

[429] Mango,Materials.97. Cormack+Hawkins,Southwest Rooms.248.note 148.

[430] Cormack+Hawkins,Southwest Rooms.197-202.

[431] Lethaby+Swainson,St.Sophia.122-23. Schneider,Hagia Sophia.36.

[432] Mathews,Early Churches.91-93.

[433] ibid.129.

[434] Cormack+Hawkins,loc.cit.

[435] Strube,Eingangsseite,52. Mainstone,Hagia Sophia.29.

[436] Reiske,de cer.I.14. Vogt,de cer.I.10-11.

[437] Reiske,de cer.I.132. Vogt,de cer.I.122.

[438] Reiske,de cer.I.64. Vogt,de cer.I.58.

[439] Reiske,de cer.I.144. Vogt,de cer.I.134.

[440] Reiske,de cer.I.192. Vogt,de cer.II.1-2. なおこの章で取り上げられている戴冠式の模様は、レオン５世（813.7.11）かミカエル２世（820.12.25）のものがモデルとなっていると考えられているが、断定はできない。 Strube,Eingangsseite.47. note 142. なお皇帝の戴冠式に関しては Treitinger,Idee.14-. が参考になる。

[441] Reiske,de cer.I.28. Vogt,de cer.I.22.

[442] Strube,Eingangsseite.163.

[443] Antoniades,Hagia Sophia.I.151-52.

[444] ナルテックスの現状については以下の文献が詳しい。Strube,Eingangsseite. 16-18. Mainstone,Hagia Sophia.32.

[445] A.M.Schneider,*Die Grabungen im Westhof der Sophienkirche zu Istanbul*, IF12, Berlin, 1941. ここでは Mainstone,Hagia Sophia.123. による。

[446] Müller-Wiener,Bildlexikon.87.

[447] Mainstone,Hagia Sophia.104-05.

[448] Müller-Wiener,Bildlexikon.89. Mainstone,Hagia Sophia.113.

[449] Strube,Eingangsseite.20-23.

[450] Strube,Eingangsseite.30-36. Mainstone,Hagia Sophia.123-24.

[451] Mathews,Early Churches.89-90. Strube,Eingangsseite.loc.cit. Taf.1-2. Mainstone,Hagia Sophia.loc.cit. 271.A2. なおシュナイダー以前の復元案に関しては Strube,Eingangsseite.23-33. が問題点も含めて手際良くまとめてある。

[452] Strube,Eingangsseite.54-56.

[453] Reiske,de cer.I.74. Vogt,de cer.I.67.

[454] Reiske,de cer.I.164. Vogt,de cer.I.152-53.

[455] Reiske,de cer.I.156. Vogt,de cer.I.142-43.

[456] Schneider,Hagia Sophia.36. Mathews,Early Churches.fig.48.49. Strube, Eingangsseite. Taf.1. Mainstone,Hagia Sophia.271.A2.

[457] Reiske,de cer.I.126. Vogt,de cer.I.117.

[458] Reiske,de cer.I.157-58. Vogt,de cer.I.146.

[459] ἐπι τὸ μητάτον ἀπὸ τοῦ τριγώνου

[460] Reiske,de cer.II.636.

[461] この問題に関してシュトゥルーベも異なる扉を差すと考えている。 Strube, Eingangsseite.49.

[462] ディダスカレイオン：διδασκαλεῖον これは信者の教育や聖人伝などの文書の管理を目的とした組織であったようである。(R.J.Macrides,"Didaskalos",ODB.619.)

[463] Strube,Eingangsseite.34.Anm.98.

[464] Cormack+Hawkins,Southwest Rooms.248.note 148.

[465] Dirimtekin,op.cit.

[466] Strube,Eingangsseite.52-54.

[467] この三者の差はヴァン・ナイスの実測図からはっきりと見て取ることができる。 Van

Nice,Hagia Sophia.pl.1.pl.10.

[468] G.P.Majeska,"Note on the Arceology of St.Sophia at Constantinople: The Green Marble Bands on the Floor", DOP 32(1982), 299-308. これは床面の緑の帯に関するほぼ唯一の研究である。マジェスカはこの帯の機能として儀式との関連を示唆している。それによるとある人物（例えば総主教）が堂内のこの帯の何本目を横切ったかが、儀式のある動作（例えば照明用蝋燭の点火）の目安となったそうである。しかし彼は、ハギア・ソフィアにおける具体例はほとんど提示していない。

[469] Reiske,de cer.I.15. Vogt,de cer.I.11.

[470] Mamboury,Topographie.207.

[471] この大きな床モザイクの年代は確定されていないが、当初でないことは確かなようである。Mainstone,Hagia Sophia.226.

[472] Reiske,de cer.I.16-17. Vogt,de cer.I.12.

[473] マシューズはこのときの南側廊から身廊に向かう南北方向の移動は、身廊と側廊の間に位置する列柱の中央を通しておこなわれたものと考えている。Mathews,Early Churches.161-62.

[474] Reiske,de cer.I.65. Vogt,de cer.I.59.

[475] Reiske,de cer.I.133. Vogt,de cer.I.123.

[476] Reiske,de cer.I.74.164. Vogt,de cer.I.67.152-53.

[477] Reiske,de cer.I.28. Vogt,de cer.I.67.22.

[478] supra. note 53.

[479] この時代の堂内装置全体については Mathews,Early Churches.11-102. が詳しい。アンボについては研究対象がギリシャ国内の遺構に限定されているが P.H.F.Jakobs,*Die frühchristlichen Ambone Griechenlands*, Bonn, 1987. が参考になる。小アジアのアンボの遺構の研究は比較的進んではいないが M.Dennert,"Mittelbyzantinische Ambone in Kleinasien",IM 45 (1995), 137-47. が重要である。これは今まで存在しないとされてきた、8世紀以降のアンボの遺構に光を当てた点で画期的なものである。また6世紀コンスタンティノポリスのテンプロンに関しては U.Peschlow,"Zum Templon in Konstantinopel", *Armos Timetikos Tomos*, 1449-75, Thessalonike, 1991. が重要である。テンプロンの展開過程に関しては H.Belting,Bild und Kunst, München, 1991.253-. が参考になる。C.Mango, "On the History of the Templon and the Martyrion of St Artemios at Constantinople", *Zograf* 10 (1979), 1-13. もその観点から見ると大変興味深い。

[480] S.G.Xydis,"The Chansel Barrier, Solea, and Ambo of Hagia Sophia", AB 29(1947) 1-24.

[481] Majeska,op.cit.304-08.

[482] 例えばテンプロンの装飾に関して、クライドル＝パパドプーロスは重要な反論を加えている。K.Kreidl-Papadopoulos,"Bemerkungen zum justinianischen Templon der Sophienkirche in Konstantinopel: Mit einem Anhang von Johannes Koder", JöB 17(1968) 279-89

[483] Paulos Silentiarios,Ἔκφρασις τοῦ ἄμβωνος. このパウロス・シレンティアリオスの『アンボについて』はフリートレンダー版(ed.P.Friedländer, *Johannes von Gaza und Paulus Silentiarius*, Leipzig-Berlin, 1912.) が基本となっている。現代語訳は何れも部分訳で以下に見ることができる。(Mango,Art.91-96. Lethaby+Swainson,Hagia Sophia.53-66. Richter,Quellen.84-90.)

[484] Antoniades,II.51-61.

[485] Xydis,op.cit.23.fig.33.

[486] Majeska,op.cit.301.

[487] Jakobs,op.cit.27-30.

[488] テンプロンの復元案については 太記祐一、『Terminus Sacer ―コンスタンティノポリスのテンプロンに関する一考察―』、建築史の鉱脈：大河直躬先生退官記念論文集218-239、大河直躬先生退官記念論文集刊行会、1995 に要約がある。

[489] Paulos Silentiarios,Ἔκφρασις τοῦ Ναοῦ τῆς Ἁγίας Σοφίας, このパウロス・シレンティアリオスの『ハギア・ソフィアの身廊について』もフリートレンダー版 (ed.P.Friedländer, op.cit.) が基本となる。現代語訳はやはり部分訳で以下に見ることができる。(Mango,Art.80-91. Lethaby+Swainson,Hagia Sophia.35-52. Richter,Quellen.66-79. E.Weigand,"Die 'Ikonostase' der justinianischer Sophienkirche in Konstantinopel", *Gymnasium und Wissenschaft Festgabe zur Hundertjahrfeier des Maximiliansgymnasiums in München*, München, 1949.180-)

[490] 6世紀においてはアンボが通常、聖歌隊の定位置であったことについてはマシューズが文献史料から明らかにしている。 Mathews,Early Churches.124. さらにパウロス・シレンティアリオスの『アンボについて』（この史料については supra note 459.）に「そこ（アンボの下）からは上智の呼ばわり役（＝聖職者）達が、清き子らに豊かに満ちる、神聖な歌を湧き上がらせ・・・」(vv.111-12.) とあり、アンボの下に6世紀の段階で聖歌隊がいたことの、証拠と多くの研究者は考えている。ただしマンゴはこれを少年達の聖歌隊と解釈している。 Mango,Art.93.note 183. また前章でみてきたように『儀式について』、『テュピコン』ともに、たびたびアンボで聖歌が歌われることに言及している。

[491] Reiske,de cer.I.15. Vogt,de cer.I.11.

[492] 他に復活祭（第９章）、生誕祭（第２３章）、神現祭（第２６章）、十字架挙栄祭（第２２章）。

[493] τὸ πορφυροῦν ὀμφάλιον

[494] Mamboury,Topographie.201-02.

[495] Reiske,de cer.I.16-17. Vogt,de cer.I.12.

[496] この部分の原文はライスケの校訂によると "καὶ διέρχονται διὰ τοῦ δεξιοῦ μέρους τοῦ βήματος ἔξωθεν" となっており、彼自身はこの部分を「ベーマの右の部分を通って出て ("per dextram bematis partem discedunt")」と訳していて(Reiske,de cer.I.17.)、ヴォクトもこれを踏襲している("sortent par le côté droit du sanctuaire", Vogt,de cer.I.13.)。これに対してシュナイダーは「至聖所から右へ向かって退出し("verlassen den Alterraum nach rechts")」と意訳している(Schneider,Hagia Sophia.24.)。しかしこれらの解釈では第９章の記述と明らかな矛盾が生じる。また残念ながら第２３章、第２６章にはこの部分の具体的な記述がないため、比較検討することはできない。このため多くの研究者は困惑を隠せず明言を避けている(Mathews, Early Churches.loc.cit. Mainstone,Hagia Sophia.232)。何れにせよライスケ以来の通説にしたがうと、出入口で分れの挨拶をしたあとで内部を通ってもう一つの出入口から出ることになり、常識と照らし合せたときに不自然である。この部分をタフトは「ベーマの右側面の（至聖所の障壁の）外を経て進み("go via the right side of the bema outside [the sanctuary barrier]")」と訳している(Taft,Great Entrance.195.)。これは "ἔξωθεν" を動詞「（通って）出る」の活用形と考えた通説とは異なり、副詞「・・・の外を」と考えたものと思われる。同様にケーラーもこの部分を「祭壇のたっている段に沿って進み ("passing along the steps on which the altar stands")」と意訳しており (Kähler,Hagia Sophia.64.) 、タフトと同じ解釈と思われる。筆者の能力ではタフトの解釈の文法的な妥当性は判断できないが、内容的に考えてタフトの訳の方が適切であるため、本稿ではこちらに従うことにした。

[497] Reiske,de cer.I.17. Vogt,de cer.I.13.

[498] Reiske,de cer.I.65. Vogt,de cer.I.60.

[499] Reiske,de cer.I.17. Vogt,de cer.I.13.

[500] Reiske,de cer.I.66. Vogt,de cer.I.60.

[501] Strube,Eingangsseite.72-73.

502) Mainstone,Hagia Sophia.232.

503) Mamboury,Topographie.200.207.

504) ソレアは後の時代には、障壁の前に帯状に南北に延びた、一段高くなっている部分を差すようになった。マンブーリはこのタイプのソレアを想定している。しかし『儀式について』の書かれた時代には、まだ6世紀の通路状のソレアがハギア・ソフィアでは使用されていた。R.F.Taft,"Solea".ODB.1923.

505) Reiske,de cer.I.236-44. Vogt,de cer.II.44-50.

506) このときは、パトリキオス達がハギア・ソフィアを訪れる。「教会に入り、ソレアに入ると、そこには移動式祭壇が立っている。」(Reiske,de cer.I.240. Vogt,de cer.II.47.) そこで彼等は、総主教のたちあいのもと献納品をこの祭壇に納めるのである。なおこれに関しては続く第48章には、パトリキオスの昇進に関するより古時代の記録が残されている。(Vogt,de cer.II.commt.59-70.) こちらには神聖な井戸を通ってハギア・ソフィアを訪れたパトリキオスが、神聖な扉の前で祈り総主教から領聖を受けることが書かれている。しかしながら移動式祭壇に関する記述はない。(Reiske,de cer.I.250. Vogt,de cer.II.56.)

507) Ebersolt,Ste Sophie.17.

508) 具体的には先の第47章以外には以下の三例がある。

復活祭の月曜日：聖使徒教会、ギャラリー「至聖所の向かい」＝皇帝と廷臣達が領聖

復活祭の火曜日：ハギオイ・セルギオス・カイ・バッコス、ギャラリー「至聖所の向かい中央の入口の上」＝廷臣達が領聖

昇天祭：ペーゲー、ギャラリー「慣例どおりの場所」＝皇帝と廷臣達が領聖

509) Mathews,Early Churches.172-73.

510) Reiske,de cer.I.17-18. Vogt,de cer.I.13.

511) Reiske,de cer.I.66-67. Vogt,de cer.I.60-61.

512) πούλπιτον

513) Reiske,de cer.I.133-34. Vogt,de cer.I.124.

514) Strube,Eingangsseite.72.

515) Mathews,Early Churches.172-73.

516) Mainstone,Hagia Sophia.232.

517) Paulos Silentiarios,op.cit.vv.755-.(Mango,Art.88-89.)

518) Reiske,de cer.I.15. Vogt,de cer.I.11.

519) Reiske,de cer.I.65. Vogt,de cer.I.59.

520) Mamboury,Topographie.200-01.203.208.

521) 「(皇帝は)キボリオンの銀の柱までついていき、府主教達の脇で(総主教の)選挙に参加した。」(Reiske,de cer.II.636.)

522) Paulos Silentiarios,op.cit.vv.720-.(Mango,Art.88.)

523) Reiske,de cer.I.15-16. Vogt,de cer.I.11-12.

524) Paulos Silentiarios,op.cit.vv.362-.(Mango,Art.81.)

525) ハギア・エイレーネーに関しては以下の文献を参照した。Müller-Wiener, Bildlexikon.112-17. U.Peschlow, *Die Irenenkirche in Istanbul, Untersuchungen zur Architecture*, IM-Beiheft 18, Tübingen, 1977. Mathews,Early Churches.77-88.

526) Mathews,Early Churches.99. Mainstone,Hagia Sophia.219.fig.252.

527) Reiske,de cer.I.17. Vogt,de cer.I.13.

528) ibid.loc.cit.

529) Reiske,de cer.II.549. 四旬節第一月曜日(II.x.)

530) Reiske,de cer.I.16. Vogt,de cer.I.12. 総主教の選挙(Reiske,de cer.II. 565-66.)、テオフュラクトスの選挙にもほぼ同じ記述がある。(Reiske,de cer.II.636.)

531) Reiske,de cer.I.18. Vogt,de cer.I.13-14.

532) Reiske,de cer.I.67. Vogt,de cer.I.61.

533) Reiske,de cer.I.68. Vogt,de cer.I.62.

534) Mamboury,Topographie.204-05. Strube,Eingangsseite.74. Mango,Brazen House. 72.

535) Strube,Eingangsseite.104. Mathews,Early Churches.96.134. メインストンは逆により新しい時代のものだと考えている。 Mainstone,Hagia Sophia.226.

536) Reiske,de cer.II.549.

537) Reiske,de cer.I.160. Vogt,de cer.I.147-48.

538) II.xiv.,II.xxxviii.

539) Reiske,de cer.II.566. ibid.II.636 にも類似の記述を見ることができる。

540) Mango,Brazen House.91.

541) 「(シカルというサマリアの町で)そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。」ヨハネIV.vi.

542) Reiske,de cer.I.18. Vogt,de cer.I.14.

543) Reiske,de cer.I.18-19. Vogt,de cer.I.14. 同様の記述は復活祭(I.ix.) 神現祭(I.xxvi.) 十字架挙栄祭(I.xxii.) 聖大土曜日(I.xxxv.) 正統信仰(I.xxviii.) にも見ることができる。

544) 聖母生誕祭(I.i.) 受胎告知＋四旬節第三日曜日(I.xxx.)

545) Reiske,de cer.II.548. 四旬節第一月曜日(II.x.)、他に以下の祭日に同様な次第を見ることができる。復活祭の月曜日(I.x.) 聖大土曜日(I.xxxv.) 進堂祭＋四旬節第一月曜日(I.xxvii.)

546) Mango,Brazen House.85-87.

547) Reiske,de cer.I.27-28. Vogt,de cer.I.21-22. 聖母生誕祭(I.i.)、同様の記述は以下にも見ることができる。進堂祭＋四旬節第一月曜日(I.xxvii.) 受胎告知＋四旬節第三日曜日(I.xxx.)

548) Reiske,de cer.II.548-59. 四旬節第一月曜日(II.x.)

549) Reiske,de cer.I.34. Vogt,de cer.I.28.

550) Mango,Brazen House.70-72.

551) Mango,Brazen House.60-64.

552) Reiske,de cer.I.186. Vogt,de cer.I.174.

553) Reiske,de cer.I.125. Vogt,de cer.I.116.

554) Reiske,de cer.I.157. Vogt,de cer.I.145.

555) Reiske,de cer.I.98. Vogt,de cer.I.90.

556) Reiske,de cer.II.635.

557) Mango,Brazen House.87-92.

558) Antoniades,Hagia Sophia.II.242.328. この説は現在ほぼ通説として確立している。Mango,loc.cit. Mathews,Early Churches.93. Mainstone,Hagia Sophia.225.

559) Reiske,de cer.I.125. Vogt,de cer.I.116.

560) Strube,Eingangsseite.86.

561) Reiske,de cer.I.157. Vogt,de cer.I.145.

562) Reiske,de cer.I.160. Vogt,de cer.I.148.

563) トマイテースにも総主教用のメータトーリオンがあり、ハギア・ソフィアのギャラリーから行くことができた。 Reiske,de cer.I.260. Vogt,de cer.II.65.

564) Reiske,de cer.II.635-36.

565) Mathews,Early Churches.130-. Strube,Eingangsseite.87-.

566) Kähler, Hagia Sophia. 41. Mathews, Early Churches. 95. Mainstone, Hagia Sophia. 225.

567) Mango,Mosaics,29-38.

568) Kähler,Hagia Sophia.41.

569) Reiske,de cer.II.564.

570) Cormack+Hawkins, Southwest Rooms.247-51.

571) Guilland,Topographie.14-27. Mango,Brazen House.51-56.

572) Strube,Eingangsseite.87-96.

573) Reiske,de cer.I.34. Vogt,de cer.I.27.

574) Reiske,de cer.I.182. Vogt,de cer.I.171.

575) Schneider,Hagia Sophia.36. Mathews,Early Churches.16-19. Mainstone, Hagia Sophia.137-141.

576) ハギア・ソフィアのスケウオフュラキオンの現状に関しては S.Turkoglu, "Ayasofya skevophilakionu kazisi", Ayasofya Muzesi Yilligi 9 (1983), 25-35. が重要であるが、筆者未見のため、Mainstone,Hagia Sophia. 137-41. の要約を参考にした。他には以下の著作が重要である。Mathews,Early Churches.16-19. F.Dirimtekin, "Le skevophylakion de Sainte-Sophie", REB 19 (1961) 390-400. この建物の建設年代に関して、多くの研究者は以下の諸点を上げ、現在のこの円形の建物が360年に献堂された、コンスタンティオス2世による最初のバシリカ式のハギア・ソフィアのスケウオフュラキオンと同一と考えている。文献史料には404年の火災で、スケウオフュラキオンが焼失を免れたとの記述がある。さらにこの火災に続くテオドシオス2世時代の工事は比較的小規模で、このような小さな建物まで改築したとは考え難い。そして構法的に見てこの建物は4・5世紀に遡るものである。

577) Mathews,Early Churches.159-61. Taft,Great Entrance.185-91.

578) Antoniades,Hagia Sophia.I.161-63. Strube,Eingangsseite.60 note 209. Mainstone,Hagia Sophia.124.

579) 『儀式について』第2巻第22章にこのようすが描かれている。しかしながら大洗礼堂の位置や建築に関する記述はない。 Reiske,de cer.II.619-620.

580) Reiske,de cer.I.34. Vogt,de cer.I.27-28.

581) Reiske,de cer.I.182-83. Vogt,de cer.I.171.

582) Taft,Great Entrance.186-87.

583) この経路についてはマシューズも同意見である。 Mathews,Early Churches. 160.

584) Vogt,de cer.commt.I.78.

585) Ἅγιος Νικόλαος τὰ Βασιλίδου

586) Janin,EM.368-69. Guilland,Topographie.II.21.

587) Guilland,loc.cit.. Mango,Brazen House.66.

588) この主題に関しては以下の文献を参考にした。フォロス自体に関しては Vogt,de cer.I. commnt.73-74. Janin,CB.62-64. Müller-Wiener,Bildlexion.255-57. Mango,Development.25-26.コンスタンティノスの記念柱については Janin,CB.77-80. C.Mango, "Constantinopolitana", Jahrbuch des deutschen archäologischen Instituts 80 (1965), 305-336. Idem, "Constantine's Column", *Studies on Constantinople*, IV. London, 1993. R.H.W.Stichel, "Zum Postament der porphyrsäule Konstantins des Großen in Konstantinopel", IM 44(1994), 317-27. 礼拝所を取り扱ったものはたいへん数が少ないが Janin,EM.296. C.Mango,"Constantine's Porphyry Column and the Chapel of St Constantine", Deltion tes Christianikes Archaiologikes Hetaireias, ser.4,X. Athens, 1981. 103-10. が重要である。

589) Chronicon Paschale.I.527.(Mango,Art.7.)

590) この柱の当初の高さに関しては様々な説がある。supra note 588.

591) この工事に関して従来、柱頭が落下した際に柱身の円筒形の石材も三個落下し、高さを減らしたままの柱身に新しい柱頭が載せられた、言い換えれば本来の柱は現状よりも石材三個分（約10m）高かった、と考えられてきた。Janin, loc.cit. Müller-Wiener, loc.cit. etc. マンゴによればこれはペトルス・ギリウスの誤訳に基づくもので、柱が当初もとにしたであろうコリント式オーダーの比例関係から考えて、この柱身は当初から高さを変えていないと主張している。Mango, "Constantinopolitana", Jahrbuch des deutschen archäologischen Instituts 80 (1965), 306-13.

592) この工事のおこなわれた年代に関して、1701年とするのが通説である。Janin, loc.cit. Müller-Wiener, loc.cit. etc. しかしマンゴはこの数字を19世紀の先行研究の誤まちをそのまま踏襲したものとし、1779年が正しい年代と主張している。Mango, loc.cit.

593) Reiske,de cer.I.23-30.74-75.164-65. Vogt,de cer.I.22-24.67-68. 153-154.

594) Reiske,de cer.I.169. Vogt,de cer.I.157.原文には「風(ἀήρ)があるとき」となっているが、記述内容から荒天の場合と考えた。最も研究者の中には時代による儀式の次第の変化ととるむきもある。Strube,Eingangsseite.77.

595) ペトルス・ギリウスは南仏出身の人文学者で、16世紀に東地中海沿岸を広く旅行し、コンスタンティノポリスに関して帰国後、『コンスタンティノポリスの地誌学と古代の遺物に関する四書』を著した。この紫の柱については第三巻第二章に記述がある。Petrus Gyllius, "De topographia Constantinopoleos et illius antiquitatibus libri quatuor", Lyon, 1561. Pierre Gilles, *The Antiquities of Constantinople*, transl. John Ball (1st Edition, London, 1729), ed. Ronald G. Musto, New York, 1988.

596) この問題に関してはR.H.W.Stichel, "Zum Postament der Porphyrsäule Konstantins des Großen in Konstantinopel", IM 44(1994), 317-27.が特に詳しい。またこの論文は柱台のレリーフ装飾についても独自の考察を加えている。

597) この図面は以下の著作に見ることができる。Müller-Wiener,Bildlexion. 256 Abb.288.（断面図のリライト） Mango,"Constantine's Porphyry Column and the Chapel of St Constantine", Deltion tes Christianikes Archaiologikes Hetaireias, ser.4,X. Athens, 1981. Pl.18 a-b.（断面図と平面図の原図の写真）

598) E.Mamboury,"Le forum Constantin, la chapelle de St. Constantin et les mystères de la Colonne Brulée", *Pepragmena tou 9. Diethnous Byzantinou Synedriou I*, Athens, 1955, 275-280.が特に重要であるが、残念ながら筆者未見のため、本稿では主にMüller-Wiener,Bildlexion. 255- 57.とC.Mango,"Constantine's Porphyry Column and the Chapel of St Constantine", Deltion tes Christianikes Archaiologikes Hetaireias, ser.4,X. Athens, 1981. 103-10. を参考にした。

599) キオノスタシア：κιονοστασία

600) 基本的にこの項は以下の文献を下敷きにしている。C.Mango,"HOLY APOSTLES, CHURCH OF THE / Holy Apostles in Constantinople",ODB.940. Janin, EM.41-50. またこの教会の建築に関する基本的な史料としては以下のものがあげられる。まずコンスタンティノスの造営に関しては、史料の信憑性など問題点は多いがエウゼビオスの『コンスタンティノス伝』（Eusebios, Vita Constantini,IV.58-. PG.20. / SLNPNF.1）は避けて通れない。本論文で主に問題となるユスティニアノスによる建築に関しては、まず6世紀のプロコピオスの『建築について』に建築形態の記述（Procoius,de aedif.I.iv.9-.）とエフェソスのハギオス・ヨアンネスとの類似性についての記述が（v.i.4-.）みられる。また10世紀中頃おそらく940年前後に成立したコンスタンティノス・ロディオスの『聖使徒教会に関する記述』（Constantin le Rhodien, "Description des œuvres d'art et de l'église de Saints Apôtres de Constantinople", REG 9(1896) 32-65）という韻文、それから1200年前後に書かれたニコラオス・メサリテスの同じ題名の文章（Nikolaos Mesarites, *Description of the Church of the Holy Apostles at Constantinople,*

Transactions of the American Philosophical Society vol.47 part 6, ed./transl. G.Downey, Philadelphia, 1957）が重要である。

601) この問題に関して、ダウニーは『コンスタンティノス伝』の史料批判をおこない、この文書はエウゼビオス本人によってではなく彼の後継者によって大幅に書き換えられて完成したとし、聖使徒教会の建設に関しては、計画はコンスタンティノスにさかのぼりうるとしながらも、建設自体はコンスタンティオスによるもので、霊廟は350年代、教会本堂は370年に完成したとしている（G.Downey,"The Builder of the Original Church of the Apostles at Constantinople - a Contribution to the Criticism of the VITA CONSTANTINI Attributed to Eusebius", DOP 6 (1951) 53-80.）。ところがこれに対してクラウトハイマーは、まったく正反対の見解を表明している（R.Krautheimer, "Zu Konstantins Apostelkirche in Konstantinopel", *Mullus Festschrift Thoedor Klauser*, Jahrbuch für Antike und Christentum Ergänzungsband 1. Münster, 1964. 224-29.）。彼によると『コンスタンティノス伝』は337年の皇帝の死から340年のエウゼビオスの死の間に書かれたもので、文書に登場する教会は十字型の教会本堂であり、霊廟はその後４世紀後半に建設されたものである。一方、マンゴは『コンスタンティノス伝』それ自体は敢て問題にせずに、この史料が取り上げている建築物を考察の対象にしてクラウトハイマーに反論を加えている（C.Mango,"Constantine's Mausoleum and the Translation of Relics", BZ. 83(1990). 51-62.）。彼の主張は以下のようになる。『コンスタンティノス伝』に登場しクラウトハイマーが十字型平面の教会堂であると考えた建築物は円形の霊廟と見るのが適切で、この霊廟はローマ皇帝の伝統に則り皇帝自身によって自分の墓所として造営された。そしてその後に、聖者の遺物が帝都に移されて、これを保管するための十字型平面の教会堂が建てられた。なおマンゴはすでに70年代に、この説をもっていたようである（Mango,Art.44.51.）。おそらく一連のマンゴの説の根底にはグリエルソンの62年の論文（後出）で提出された説があるのだろう。

602) この主題に関しては『儀式について』の第２巻第４２章（Reiske,de cer.II. 642-49.）が重要である。またこれをもとにした先行研究としてはグリエルソンのものがある（Ph.Grierson,"The Tombs and Obits of the Byzantine Emperors (337-1042)", DOP.16(1962).1-63.）。

603) この問題に関しては先にあげたプロコピオス、コンスタンティノス、ニコラオスの三人の記述をどう評価するかが意見の分れ目となる。クラウトハイマーはこれらの文字史料と『バシレイオス２世のメネロギオン』のヴァティカンの写本の三葉の絵画史料（Vat.gr.1613, fol.121. fol.341. fol.353.）、ヴェネツィアのサン・マルコ、エフェソスのハギオス・ヨアンネスの二つの建築遺構を比較して、ユスティニアノスの教会堂のドームは940年から989年の間により高いものに置き換えられた、と主張している（R.Krautheimer,"A Note on Justinian's church of the Holy Apostles in Constantinople", in Melanges Eugene Tisserant, II, Vatican, 1964, 265-70. reprinted in *Studies in Early Christian, Medieval and Renaissence Art*, London/New York, 1969.197-201.）。これに対してエプステインはまったく同じ材料を分析して、そのような改修工事はなかったと反論している（A.W.Epstein,"The Rebuilding and Redecoration of the Holy Apostles in Constantinople: A Reconsideration", GRBS 23 (1982). 79-92.）。

604) Strube,Eingangsseite.134-38. ここで彼女が取り上げた先行研究は以下のとおりである。Hübsch(1863), Reinach(1896), Wulff(1898), Heisenberg(1908), Gurlitt(1912), Sotiriou(1921-22), Wulzinger(1932), Bettini(1946).

605) シュトゥルーベがまとめたものを使用した。彼女は先行研究の復元案の中ではハイゼンベルク（ナルテックスが一層である点を問題視）とグルリット（窓の配置を問題視）のものを評価しているようである。

606) Reiske,de cer.I.77-82. Vogt,de cer.I.68-74.

607) Reiske,de cer.II.537-38.

608) Reiske,de cer.II.532-34.

609) ここでは以下の文献を参考にした。Strube, Eingangsseite. 78. 138-47.

610) 例えばProcopios,de aedif,I.iv.20-22.

611) Strube, Eingangsseite. 141-42.

612) Reiske,de cer.II.532.

613) 例えばNikolaos Mesarites, op.cit.VI.1-6.

614) 万聖人とするのが通説だがここはシュトゥルーベに従う。supra note 387.

615) Reiske,de cer.II.535.

616) Strube,Eingangsseite.145-46.

617) 「万聖人の行進は四旬節中の型に従っておこなわれ、また復活祭の月曜日や復活祭後の日曜日をおこなうようにやる。」(Reiske,de cer.II.535.)

618) Janin,CB.Carte No.V. Mango,Developpement.Pl.2.

619) Janin,EM.295.

620) Grierson,op.cit.21-29.

621) Janin,EM.331.

622) Mateos,Typicon.I.314-15.

623) Grierson,op.cit.29-36.

624) Janin,EM.389-90.

625) G.Downey,"The Church of All Saints near the Church of the Holy Apostels at Constantinople, DOP 9-10 (1956) 301-06.

626) Strube,Eingangsseite.142-45.

627) Reiske,de cer.II.537-38.

628) Janin,EM.306. Strube,Eingangsseite.145.

629) Janin,EM.245.

630) Downey,loc.cit.

631) Janin,EM.491.Strube,Eingansseite.loc.cit.

632) S.Eyice,"Les fragments de la décoration de l'église des Saints-Apôtles", CA 8(1954) 63-74.

633) Janin,CB.128-29.

634) Janin,CB.206-07.

635) Strube,Eingangsseite.147. この点ではジャナンも同意見である。 Janin,EM.48.

636) Janin,EM.295.

637) Reiske, de cer. II. 532-35.

638) "Patria Constantinopoleos", ed. Th.Preger, *Scriptores Originum Constantinopolitanarum*, 2vols. Leipzig.1907.reprinted,Leipzig.1907. II.263.

639) この項は以下の文献を主に参考にした。Janin,EM.237-42. C.Mango, "Chalkoprateia", ODB.407-08. Mathews,Early Churches.28. Müller- Wiener,Biidlexikon.76-77. Richter,Quellen.154-55.

640) G.P.Majeska,Russian.336

641) クライスの報告には登場しないが、マンゴによるとこの教会の付属の八角堂の地下部分にパライオロゴス朝時代のフレスコ画の断片が残っていたそうである。C.Mango, "Notes on Byzantine Monuments",DOP 23-24 (1969-1970), 369-75. esp."II. Frescoes in the Octagon of St. Mary Chalkoprateia, Istanbul",369-72.

642) この項は以下の文献を参考にした。Janin,EM.237-42. Strube,Eingangsseite.57-58. 62.77.

643) Reiske,de cer.I.29-31. Vogt,de cer.I.23-25.

644) Reiske,de cer.I.165-67. Vogt,de cer.I.154-55.

[645] Reiske,de cer.I.108. Vogt,de cer.I.101. 同様な記述は第２巻第１３章聖使徒教会訪問の際にもみることができる。

[646] この項は上記文献に加えて以下のものを参考にした。W.Kleiss, "Neue Befunde zur Chalkopratenkirche in Istanbul", IM.15(1965).149-157. idem."Grabungen im Bereich der Chalkopratenkirche in Istanbul 1965",IM.16(1966).217-240. C.Mango, "Notes on Byzantine Monuments", DOP 23-24 (1969-1970), 369-75. esp."II. Frescoes in the Octagon of St. Mary Chalkoprateia, Istanbul",369-72.

[647] 1996年に訪れた限りでは、この遺構は駐車場とホテルに挟まれて外部からは近づくことが出来ず、もはや宗教建築として機能していないようである。

[648] カルコプラテイアの教会は「キルクス型」である、との記述をポルフュロゲネトスの『帝国統治論』から、リヒターは引用している。この表現はマシューズによるとバシリカ式教会堂を示すのに用いられた。Mathews,Early Churches.12.

[649] この項は以下の文献を参考にした。Janin,EM.161-71. Schneider,Byz.54-. Richter, Quellen.164-66. C.Mango,"Blachernai, Church and Palace of", ODB 293. Mango, Art.34-35,125,152,154,169. Majeska,Russian.333- 338.

[650] "Ot strannika stefanova novgorodtsa"(Majeska,Russian.44-45.)「放浪者ノヴゴロドのステファンから」と題されたこの文章は1349（あるいは48）年にコンスタンティノポリスを訪れたロシア人巡礼者の記録である。

[651] 敵の艦隊がコンスタンティノポリスに押し寄せた際に、聖母のローブを海水につけたら嵐がおこった話や、敵軍との和議に向かう皇帝がこのローブを身に付けていったことなど、枚挙に暇はない。Richter,loc.cit. Janin,loc.cit.

[652] Zonaras,"Histria",XIV.1.(Richter,Quellen.165.)

[653] Gilles,Antiquities.I.xvi.41-42.

[654] この項は以下の文献を参考にした。Janin,EM.161-71. Strube,Eingangsseite.58-59.76-77.

[655] Reiske,de cer.I.150-153. Vogt,de cer.I.138-141.

[656] Reiske,de cer.II.551-56.

[657] この皇帝の私室は聖母教会ではなくソロスにあったと考える研究者もいる。 Strube, Eingangsseite.76-77.

[658] Reiske,de cer.I.156. Vogt,de cer.I.144.

[659] Taft,Great Entrance.190.

[660] Krautheimer,ECBA.105.

[661] Janin,CB.123-25.

[662] Mathews,Early Churches.38-39. Krautheimer,ECBA.103-06.

[663] Procopios,de aedif.I.iii.3-5.(Dewing+Downey.39-41.)

[664] Anthologia graeca epigrammatum,I.2/3.(Janin,EM.167-68. Richter, Quellen. 166.)

（ブラケルナイの半ドーム｛アプスのことか｝の銘文）

２：神にも似たユスティノス、ソフィアの夫君、キリストに
すべての誉れを、戦でのいさおを捧げ、
聖母の聖処女の館の荒れ具合を目にとめて、
傷みを除き堅牢な新たな家をうみ出した。

３：美の極みにより第一のユスティノスは神殿を、
マリアの館を、この優美さの光り放つところを築いたが、
もう一人のユスティノス、名前の上では彼に続く二番目の者は、
その前からの装いに更なる輝きを補い加えた。

[665] Krautheimer,ECBA.105. Ebersolt+Thiers,Eglises.18.

[666] プロコピオスは、ハギア・ソフィアや聖使徒教会の場合のような複雑の形態の建築物もきちんと記述し、一方で複雑な形態の建築でありながら記述する意志がない場合は、多くの場合その旨一言述べている。

[667] Theophanes, "Chronographia", A.M.6064, 244. (Mango, Art. 125. Richter, Quellen.165.)

[668] Leo Grammaticus:"Chronographia",133.(Richter,Quellen.166.)

[669] Krautheimer,ECBA.266-67. Ebersolt+Thiers,Eglises.88.

[670] Ruy Gonzales de Clavijo,"Historia del gran Tamerlan",63. (Richter, Quellen.169-70.)

[671] ed.G.Mercati,"Due nove memorie di S.Maria delle Blacherne", Atti delle Pont. Accad. Rom di Archeol., Memorie,I/1,1923,23-. (Mango,Art.125.)

[672] この項はほぼ全面的に以下の文献によっている。 Janin,EM.223-228. Mango, Art.103.192.200.201-02.205-06. Richter,Quellen.179-83. A.M.Talbot, "Epigramms of Manuel Philes on the Theotokos tes Pages and Its Art",DOP.48(1994).135-165. C.Mango+N.P.Sevcenko,"Pege",ODB. 1616.

[673] ペーゲーは海からも黄金門からも離れているにもかかわらず、彼は自分の記述をこのような形で締めくくっている。ちなみに彼は教会の周囲の風景の美しさは描写しているが、教会の建築物そのものに関しては、記述することの困難さしか書いていない。Procopios, de aedif. I. iii. 6-9. (Dewing+Downey,41. Richter, Quellen. 179.)

[674] Georgios Codinos,"Topographia",110.(Richter,Quellen.181.) これは１４世紀の記録だが、リヒターによると他にケドレノス、レオ・グラマティコスなど１１世紀の年代記にも同様の記述をみることができる。

[675] Ruggieri,religios Arch.113-15.

[676] この項は以下の文献を参考にした。Janin,EM.223-28. Strube,Eingangsseite.57.76.

[677] Leon Diaconos,"Caloensis Historiae",IV.7.(Richter,Quellen.182- 83.)

[678] Reiske,de cer.I.108-14. Vogt,de cer.I.101-05.

[679] Strube,Eingangsseite.76.

[680] Nikephoros Callistos Xanthopoulos,"Historia Ecclesiastica", XV, 26. (Richter,Quellen.180-81.PG.147)

[681] 原文ではストア（στοά）が使用されている。通常この単語は「列柱」を指すが、まれに「アーチ」を指すこともあり、文脈から考えて後者と解釈した。この単語をリヒターは「広間」、ジャナンは「列柱」と考えたため意味不明な訳をつけている。

[682] "De sacris aedibus Deiparae ad Fontem", ASS Nov. III, 879- (Mango,Art. 103.201-02.205-06.)

[683] この項は以下の文献を参考にした。Janin,EM.451-54. C.Mango,"Sergios and Bakchos, Church of Saints",ODB.1879. Müller-Wiener,Bildlexikon.177-83. Richter,Quellen. 312-15.

[684] R.Krautheimer,"Again Saints Sergius and Bacchus at Constantinople",JöB 23 (1974) 251-53. Krautheimer,ECBA.487. note 22.

[685] C.Mango,"The Church of Saints Sergius and Bacchus at Constantinople and the Alleged Tradition of Octagonal Palatine Churches",JöB 21(1972).189-93. C.Mango,"The Church of Sts. Sergius and Bacchus Once Again",BZ 68 (1975) 385-392.

[686] この項は以下の文献を参照した。Strube,Eingangsseite.75. Janin,EM. 453.

[687] Reiske,de cer.I.87-89.Vogt,de cer.I.79-80.

[688] この項は以下の文献を参照した。Ebersolt+Thiers,Eglises.21-51. Mathews, Early Churches.42-51. Strube,Eingangsseite.153-54. Mango,BA.58-. Krautheimer,ECBA. 222-. P.A.Underwood,"Some Principles of Measure in the Architecture of the Period of Justinian", CA 3 (1948).64-74. 建築彫刻に関してはF.W.Deichmann,Studien . 72-76. reprinted in Deichmann,RRKNO.558-562.またオスマン朝時代の改修など、先行研究の問題点に関しては O.Feld,"Beobachtungen in der Küçük Ayasofya (Kirche der hll. Sergios und Bacchos) zu Istanbul",IM.18(1968). 264-69. がそれぞれ詳しい。

[689] ed.A.Cameron + J.Herrin, Constantinople in the Early Eighth Century: The *PARASTASEIS SYNTOMOI CHRONIKAI*. Leiden, 1984. 56-57.

[690] ibid.167-68.

[691] この項は以下の文献を参照した。A.Kazhdan, "Mokios", ODB.1389-90. Janin,EM.354-58. Mango,Art.193.226-27. Richter,Quellen.11.119-21. Unger,Quellen.12.

[692] Mango,Developpement,35.

[693] この項は以下の文献を参照した。Strube,Eingangsseite.56-57.61.75. Janin,EM.357-58.

[694] Reiske,de cer.I.340-49.Vogt,de cer.II.143-50.

[695] Mateos,Typicon.I.286-89.

[696] Reiske,de cer.I.100-05.Vogt,de cer.I.93-97.

[697] Reiske,de cer.I.104.Vogt,de cer.I.96.

[698] Janin,EM.356-57.

[699] Mateos,Typicon.I.291.

[700] Gilles,Antiquities.IV.viii.204.

[701] Reiske,de cer.II.560-62.

[702] Janin,EM.387-88.

[703] Janin,CB.395-96.

[704] Reiske,loc.cit. Strube,Eingangsseite.57.

[705] ルーテール：λουτῆρ

[706] エクサエロン：ἑξάερον

[707] ἀναδενδράδιον

[708] Strube,Eingangsseite.144.note 614.

[709] R.Guilland,"Études sur le Grand Palais de Constantinople les XIX Lits",JöB 11/12(1962/63).109.

[710] Guilland,Topographie.I.143.

[711] Reiske,de cer.II.562-63.

[712] Janin,CB.431.

[713] このテーマについては以下の文献を参考にした。 A.Kazhdan,A.M.Talbot+A. Cutler, "Stoudios Monastery",ODB.1960-61. Müller-Wiener,Bildlexikon,147-52. Janin,EM. 430-40.

[714] さらにMango,Art.38.

[715] この部分は以下の文献によっている。Ebersolt+Thiers,Eglises.2-18. Krautheimer, ECBA.104-06.Mango,BA.38-.Mathews,Early Churches.19-27. なおこの教会の装飾に関しては以下が詳しい。Deichmann,Studien.69-72.

[716] Strube,Eingangsseite.57.79.にも同じ儀式について要領よくまとめてあるので、ここでは参考にした。

[717] Janin,EM.232-36. R.Jenkins+C.Mango,*The Homilies of Photius*, Cambridge, Mass., 1958. 177-183.

[718] Reiske,de cer.I.201. Vogt,de cer.II.10.

[719] Reiske,de cer.I.119-20. Vogt,de cer.I.110-11.

[720] Reiske,de cer.I.135. Vogt,de cer.I.127.

[721] Reiske,de cer.I.116-17. Vogt,de cer.I.108.

[722] Reiske,de cer.I.71. Vogt,de cer.I.64.

[723] Reiske,de cer.I.114-15. Vogt,de cer.I.106-07.

[724] Reiske,de cer.I.170-71. Vogt,de cer.I.158-59.

[725] Reiske,de cer.I.177-78. Vogt,de cer.I.165-66.

[726] Reiske,de cer.I.183-84. Vogt,de cer.I.171-72.

[727] Reiske,de cer.I.94. Vogt,de cer.I.87.

[728] Reiske,de cer.I.175. Vogt,de cer.I.163-64.

[729] R.Jenkins+C.Mango,*The Homilies of Photius*, Cambridge, Mass., 1958. 184-. (Mango,Art.185-.)

[730] ibid.177-83.Krautheimer,ECBA.355-56. Guilland,Topographie.I. 311-. Janin, EM.232-36.

[731] ibid.

[732] C.Mango,"Nea Ekklesia",ODB.1446. Mango,Art.194-. Richter, Quellen.354-. Janin,EM.361-64.

[733] Reiske,de cer.I.119-20. Vogt,de cer.I.110-11.

[734] Reiske,de cer.I.116-17. Vogt,de cer.I.108.

[735] Reiske,de cer.I.117-18.120-21.II.539.549. Vogt,de cer.I.108-09. 111-12.

[736] C.Mango,"Nea Ekklesia",ODB.1446. Krautheimer,ECBA.355-56. Mango,BA.108-09. Strube,Eingangsseite.78-79.92-93. Mango,Art.194-. Richter,Quellen.354-. Vogt,de cer.I.Commnt.135. Janin,EM.361-64. Guilland,Topographie.I.305-.

[737] Janin,EM.91-2. Vogt,de cer.I.Commt.140-1. Guilland,Topographie.I.312-15.

[738] Reiske,de cer.I.124. Vogt,de cer.I.115.

[739] Janin,EM.58.Vogt,de cer.I.Commnt.153.

[740] Reiske,de cer.I.137. Vogt,de cer.I.127.

[741] Vita Basilii,88.(Mango,Art.196.)

[742] Janin,EM.398. Guilland,Topographie.I.130-31.

[743] Reiske,de cer.I.122-23. Vogt,de cer.I.114.

[744] Vogt,de cer.I.Commnt.26. Janin,CB.112-13. Guilland,Topographie. I.81-93.

[745] Vogt,de cer.I.Commnt.27. Janin,EM.473-74. Guilland,Topographie.I.189. 499-504.

[746] Mathews,Revue de l'art,1974(24).22-29.

[747] Reiske,de cer.II.640.

[748] Reiske,de cer.I.196.201+02. Vogt,de cer.II.6.10.

[749] Reiske,de cer.I.71.129. Vogt,de cer.I.64.119-20.

[750] Reiske,de cer.I.8-9. Vogt,de cer.I.6.

[751] Reiske,de cer.I.212. Vogt,de cer.II.20.

[752] Reiske,de cer.I.141-42. Vogt,de cer.I.131-32.

[753] Reiske,de cer.I.146-47.202.208-09.218. Vogt,de cer.I.135-36.II.11.16-17. 26.

[754] Reiske,de cer.II.539.549-50.

[755] Reiske,de cer.I.174. Vogt,de cer.I.161-62.

[756] Vogt.de cer,I.commt.38-39. Janin,EM.173.487.

[757] Reiske, de cer. I. 7-9. Vogt, de cer. I.5-6.

[758] Reiske,de cer.I.174. Vogt,de cer.I.161-62.

[759] Reiske,de cer.I.71. Vogt,de cer.I.64.

[760] この問題に関しては、栗本薫『コンスタンティノープル三三〇年』史林71 1988 223-58、が詳しい。また以下の文献が基本的なものである。G.Dagron, *Naissance d'une Capitale: Constantinople et ses institutions de 330 à 451*, Paris, 1974. Tinnefeld, F. *Die frühbyzantinische Gesellschaft: Struktur- Gegensätze- Spannungen*, München, 1977 訳：弓削達、初期ビザンツ社会、岩波書店、1984、 Mango,developpment.

[761] 彼はこの主題に一冊の著作を捧げている。有名な『建築について』がそれである。(Procopios, de aedif.)

[762] Vita Basilii, Theophanes Continuatus, vol.V. ed.I.Bekker, CSBH. ここでは彼が２０棟を越える教会堂を修理、再建したことが記されている。なお『続テオファネス年代記』第５巻を構成する本史料は、コンスタンティノス７世の命によって１０世紀に編纂されたと考えられている。本論文では以下の英訳を使用した。 Mango,art. 192-.

[763] この教会は現在は失われてしまったが、基礎に関しては大部の発掘報告書がでている。R.M.Harrison, *Excavations at Saraçhane in Istanbul*, 2vols, Princeton, 1986. この教会堂の往時の姿に関しては様々な説があるが、復元案としては以下が重要である。R.Harrison, *A Temple for Byzantium*, London, 1989, *Ein Tempel für Byzanz*, translated B. Weitbrecht, Zürich, 1990

[764] Antoniades,Hagia Sophia.II.291. Strube,Eingangsseite.87-.

[765] Strube,Eingangsseite.79-.

３：考察

[766] Mathews,Early Churches.125-. Strube,Eingangsseite.92-.

[767] Krautheimer,ECBA.343-.

[768] S.Curcic, "Architectural Significance of Subsidiary Chapels in Middle Byzantine Churches", JSAH 36(1977) 94-110. Th.F.Mathews, ""Private" Liturgy in Byzantine Architecture: Toward a Re-appraisal", CA 30(1982) 125-138. N.Teteriatnikov,"Upper-Story Chapels near the Sanctuary in Churches of the Christian East", DOP 42(1988) 65-72.

[769] Vita Basilii, Theophanes Continuatus, vol.V. ed.I.Bekker, CSHB.(Mango,art. 192-.)

[770] 『バシレイオス１世伝』の記述もネアに関する部分が一番長い。

[771] すでにみてきたように史料において普通名詞で呼ばれる教会はハギア・ソフィア（大教会）とネア（新教会）だけである。

[772] Baldovin,Urban.259-

[773] Mango,Byzantium.82.

[774] A.Cameron,"The construction of court ritural: the Byzantine *Book of Ceremonies*", in ed.D.Cannadine + S.Price, *Rituals of Royalty - Power and Ceremonial in Traditional Societies* -, 106-36. Cambridge. 1987.

[775] Mango,BA.137-. Mango,Byzantium.82. A.Kazhdan, "Encyclopedism", ODB.696-97. Idem. "Renaissance",ODB.1783-84.

[776] Mango,Byzantium.82.

[777] Mango,BA.137-. R.Ousterhout, "An Apologia for Byzantine Architecture", Gesta 35(1996) 27-28.

[778] 現在のボドルム・ジャーミーである。これはコンスタンティノス・リプスの修道院（現フェナリ・イサ・ジャーミー）とともに、首都におけるマケドニア朝時代の建築の数少ない遺構の一つである。C.L.Striker, *The Myrelaion (Bodrum Camii) in Istanbul*, Princeton, 1981.

[779] 当時の人々がこの教会に対して、実際にどのようなイメージを抱いていたのかは、今後の研究課題である。８世紀に成立した伝承に基づく『ハギア・ソフィアの建設について』("Narratio de S.Sophia", ed.Th.Preger, *Scriptores originum Constantinopolitanarum*, I. 74-)にみられる、旧約聖書のソロモン王の神殿に関する言及（ユスティニアノス１世が献堂式で「ソロモンよ、われ汝に勝てり」と言ったという逸話）は一つの興味深い示唆であるが、ソロモン神殿への言及は、壮麗な建築物に対する当時の一般的な修辞法であったとの指摘もある。G.Dagron, *Constantinople Imaginaire*, Paris 1984. 303-.

参考文献略号一覧

逐次刊行物

AB=The Art Bulletin
AJA=American Journal of Archaeology
BZ=Byzantinische Zeitschrift
CA=Cahiers archéologiques
CSHB=Corpus Scriptorum Historiae Byzantinae, Bonn, 1828-97.
DOP=Dumbarton Oaks Papers
DOS=Dumbarton Oaks Studies
EHR=The English Historical Review
GRBS=Greek, Roman, and Byzantine Studies
IM=Istanbuler Mitteilungen
JöB=Jahrbuch des österreichischen Byzantinistiks
JSAH=Journal of the Society of Architectural Historians
JWCI=Journal of the Warburg and Courtauld Institutes
OCA=Orientalia Christiana Analecta
PG=Patrologiae Cursus, series Graeca, ed.J.-P.Migne, Paris,1857-.
REB=Revue des études Byzantines
REG=Revue des études Grecques
SLNPNF=Select Library of Nicene and Post-Nicene Fathers of the Christian Church
ZK=Zeitschrift für die Kunstgeschichte

主要参考文献

Antoniades,Hagia Sophia =E.M.Antoniades, Εκφράσις τῆς Ἁγίας Σοφίας, 3vols. Athen-Leipzig, 1908.

Baldovin,Urban =J.F.Baldovin, *The Urban Character of Christian Worship, The Origins, Development, and Meaning of Stational Liturgy*, OCA 228, Roma, 1987.

Cormack+Hawkins,Southwest Rooms = R.Cormack + E.J.W.Hawkins, "The Mosaics of St.Sophia at Istanbul: The Rooms above the Southwest Vestibule and Ramp", DOP 31 (1977) 175-251.

Deichmann,Studien =F.W.Deichmann, *Studien zur Architektur Konstantinopels im 5. und 6. Jh. nach Christus*, Baden-Baden. 1956.

Deichmann,RRKNO =F.W.Deichmann, *Rom, Ravenne, Konstantinopel, Naher Osten, Gesammelt Studien zur spätantiken Architektur, Kunst und Geschichte*, Wiesbaden, 1982.

Ebersolt+Thiers,Eglises =J.Ebersolt & A.Thiers, *Les églises de Constantinople*, Paris, 1913, reprinted London, 1979.

Guilland,Topographie =R.Guilland, *Études de topographie de Constantinople Byzantine*, 2vols. Amsterdam, 1969.

Janin,CB =R.Janin, *Constantinople byzantine, Développement urbain et répertoire topographique*, 2e ed. Paris, 1964.

Janin,EM =R.Janin, *La géographie ecclésiastique de l'empire byzantin, première partie: le siège de Constantinople et le patriarcat œcuménique, tome III: les églises et les monastères*, 2e ed. Paris, 1969.

Kähler,Hagia Sophia =H.Kähler, *Hagia Sophia*, Berlin, 1967. transl. E.Child, New York, 1967.

Krautheimer,ECBA =R.Krautheimer, *Early Christian and Byzantine Architecture*, 4th Ed. revised by Richard Krautheimer and Slobodan Curcic, Harmondsworth, 1986.

LCI =*Lexikon der christlichen Ikonographie*, 8vols, Roma-Freiburg-Basel-Wien, 1968.

Lethaby+Swainson,St.Sophia =W.R.Lethaby & H.Swainson, *The Church of Sancta Sophia Constantinople, A Study of Byzantine Building*, London-New York, 1894.

Mainstone,Hagia Sophia =Mainstone, *Hagia Sophia, Architecture, Structure and Liturgy of Justinian's Great Church*, New York, 1988.

Majeska,Russians =G.P.Majeska, *Russian Travelers to Constantinople in the Fourteenth and Fifteenth Centuries*, DOS 19, Washington D.C. 1984.

Mamboury,Topographie =E.Mamboury, "Topographie de Sainte-Sophie, le sanctuaire et la soléa, le mitatorion etc", Atti del V Congresso di studi byzantini, Roma, 1940, vol.2,197-209.

Mango,Brazen House =C.Mango, *The Brazen House: a Study of the Vestibule of the Imperial Palace of Constantinople*, København, 1959.

Mango,Mosaics =C.Mango, *The Mosaics of St.Sophia at Istanbul*, DOS 8, Washington D.C. 1962.

Mango,Art =C.Mango, *The Art of the Byzantine Empire 312-1453*, Englewood Cliff, 1972, reprinted Toronto, 1986.

Mango,BA =C.Mango, *Byzantine Architecture*, Milano, 1974, English Ed. New York, 1976.

Mango,Byzantium =C.Mango, *Byzantium, The Empire of the New Rome*, London, 1980.

Mango,Developpement =C.Mango, *Le développement urbain de Constantinople (IVe -VIIe siècle)*, Paris, 1990.

Mango,Studies =C.Mango, *Studies on Constantinople*, London, 1993.

Mateos,Typicon =J.Mateos, *Le Typicon de la Grande Église, Ms. Sainte-Croix no 40, Xe siècle*, 2 vols. OCA 165-66, Roma, 1962-63.

Mateos,parole =J.Mateos, *La célébration de la parole dans la liturgie byzantine, Étude historique*, OCA 191, Roma, 1971.

Mathews,Early Churches =Th.F.Mathews, *The Early Churches of Constantinople: Architecture and Liturgy*, University Park and London, 1971.

Müller-Wiener,Bildlexikon =W.Müller-Wiener, *Bildlexikon zur Topographie Istanbules*, Tübingen, 1977.

ODB =*The Oxford Dictionary of Byzantium*, 3vols, New York-London, 1991.

Procoios,de aedif. =Procopius, *Buildings*, Loeb Classical Library, transl. H.B.Dewing & G.Downey, London, 1940.

Reiske,de cer. =J.J.Reiske, *Constantini Porphyrogeniti imperatoris De ceremoniis aulae byzantinae*, 2 Vols. Bonn, 1829-1830.

Richter,Quellen =J.P.Richter, *Quellen der byzantinischen Kunstgeschichte*, Wien, 1897.

Ruggieri,Religious Arch. =V.Ruggieri, *Byzantine Religious Architecture (582-867): Its History and Structural Elements*, OCA 237, Roma, 1991.

Schneider,Byzanz =A.M.Schneider, *Byzanz*, Istanbuler Forschungen 8, Berlin, 1936.

Schneider,Hagia Sophia =A.M.Schneider, *Die Hagia Sophia zu Konstantinopel*, Berlin, 1939.

Strube,Eingangsseite =Ch.Strube, *Die westliche Eingangsseite der Kirchen von Konstantinopel in justinianischer Zeit*, Wiesbaen, 1973.

Taft,Great Entrance =R.F.Taft, *The Great Entrance, A History of the Transfer og Gifts and other Preanaphoral Rites of the Liturgy of St. John Chrysostom*, OCA 200, Roma, 1978.

Treitinger,Idee =O.Treitinger, *Die oströmische Kaiser- und Reichsidee nach ihrer Gestaltung im höfischen Zeremoniell*, Jena, 1938. reprinted Wiesbaden, 1956.

Unger,Quellen =F.W.Unger, *Quellen der byzantinischen Kunstgeschichte*, Wien, 1878.

Van Nice,St.Sophia =R.L.Van Nice, *St.Sophia in Istanbul: an architectural survey*, 2vols. Washington D.C. 1965/1986.

Vogt,de cer. =A.Vogt. *Le livre des cérémonies*, 2 Vols, Paris, 1935-36, reprinted Paris, 1967

井上、ビザンツ　=井上浩一、ビザンツ帝国、岩波書店、1982

図版目録

各図版の出典は括弧内に記した。なお筆者撮影の写真のうち「科研」とあるものは、1990年、92年、96年の文部省科学研究助成金による「ハギア・ソフィア大聖堂学術調査」に参加した際のものである。

1　地図：テオドシオス２世のコンスタンティノポリス。（マンゴによる Mango,Developpement. Plan II.）

2　地図：コンスタンティノポリスの主な通りと主な広場。（ジャナンによる Janin,CB.Carte No.V.）

3　写真：ハギア・ソフィア外観南側。（撮影 Raoul Laev, Archaeological Institute of Cologne. Kähler,Hagia Sophia. PL.1. より転載）

4　写真：ハギア・ソフィア外観西側。（撮影 Raoul Laev, Archaeological Institute of Cologne. Kähler,Hagia Sophia. PL.2. より転載）

5　図面：ハギア・ソフィア、現状の平面図。（ケーラー　Kähler,Hagia Sophia. PL.98. とヴァン・ナイス Van Nice, St.Sophia に基づきミュラー＝ヴィーナーによる Müller-Wiener, Bildlexikon.90. Abb.75.）

6　図面：ハギア・ソフィア、現状の東西断面図（上）と南北断面図（下）。（ヴァン・ナイス Van Nice, St.Sophia に基づきケーラーによる Kähler,Hagia Sophia. PL.97.）

7　写真：1930年代のハギア・ソフィアの身廊、アプス方向を西ギャラリーより望む。（シュナイダーによる Schneider,Hagia Sophia. Abb.17.）

8　図面：アンコーナのキュリアクスによる１５世紀前半のスケッチ、ハギア・ソフィア身廊西側入口部分内部立面（上）と外観西正面（下）のジュリアーノ・ダ・サンガルロによる写し。（Vat.Barb. lat.4424, fol.28r. S.Huelson, *Il Libro di Giuliano da Sangallo*, Leipzig,1910. Ch.Smith, "Cyriacus of Ancona's Seven Drawings of Hagia Sophia", AB 69 (1987) 16-32. 17. PL.1. から転載）

9　図面：1680年、グルロによる西南方向から見たハギア・ソフィアの外観スケッチ。（G.J.Grelot, *Relation nouvelle d'un voyage de Constantinople*, Paris, 1680. Mainstone,Hagia Sophia. 113. PL.139. から転載）

10　図面：フォッサーティによる1847年、工事前のハギア・ソフィアの外観、西南から望む。（G. Fossati, *Aya Sofia, Constantinople, as recently restored by order of H.M. the Sultan Abdul Medjid*, London, 1852. PL.25. Mainstone,Hagia Sophia.102. PL.125. から転載）

11　図面：フォッサーティによる1847年、工事前のハギア・ソフィアの内観、西から望む。（G. Fossati, *Aya Sofia, Constantinople, as recently restored by order of H.M. the Sultan Abdul Medjid*, London, 1852. PL.24. Mainstone,Hagia Sophia.18. PL.9. から転載）

12　写真：南側から見たハギア・ソフィア南西の付属建築群。（筆者撮影1996科研）

13　写真：ハギア・ソフィア、ナルテックス南側前室のナルテックス側の入口を南から見る。（メインストンによる Mainstone,Hagia Sophia.31. PL.29.）

14　写真：ハギア・ソフィア、内側のナルテックスを北から南へ見る。（メインストンによる Mainstone,Hagia Sophia.33. PL.32.）

15　図面：ハギア・ソフィア、563年時点のアトリウムの復元平面図。（M.Gaupp による Strube,Eingangsseite. Tafel I.から転載）

16　図面：ハギア・ソフィア、563年時点での西正面の復元立面図。（M.Gaupp による Strube,Eingangsseite. Tafel II.から転載）

17　図面：ハギア・ソフィア、身廊の現状平面図。（ヴァン・ナイスによる Van Nice, St.Sophia. PL.1.）
18　写真：ハギア・ソフィア、身廊の様子。（撮影 Raoul Laev, Archaeological Institute of Cologne. Kähler, Hagia Sophia. PL.28. より転載）
19　図面：ハギア・ソフィア身廊床面、緑色の石材の現状。（マジェスカによる G.P.Majeska, "Notes on the Archaeology of St. Sophia at Constantinople: The Green Marble Bands on the Floor", DOP 32(1978) 299-308. 301.fig.A.）
20　図面：ハギア・ソフィア、想定される堂内装置の位置。（マジェスカによる G.P.Majeska, "Notes on the Archaeology of St. Sophia at Constantinople: The Green Marble Bands on the Floor", DOP 32(1978) 299-308. 307.fig.B.）
21　図面：ハギア・ソフィアのアンボ、ソレア、テンプロンの復元平面図。（クシュディスによる S.G.Xydis, "The Chansel Barrier, Solea, and Ambo of Hagia Sophia", AB 29(1947) 1-24. 23. fig.32.）
22　図面：ハギア・ソフィア、アンボとテンプロンの復元側面図。（クシュディスによる S.G.Xydis, "The Chansel Barrier, Solea, and Ambo of Hagia Sophia", AB 29(1947) 1-24. 23.fig.33.）
23　図面：ハギア・ソフィア、アンボの復元側面図（上）と復元平面図（下）。（アントニアデスによる Antoniades,Hagia Sophia.II.59. fig.242-43.）
24　図面：当時のハギア・ソフィアの堂内装置の想像復元図。（メインストンによる Mainstone, Hagia Sophia.233. fig.252.）
25　写真：ハギア・ソフィア、身廊アプス前の床面を見下ろす。（筆者撮影1996科研）
26　写真：ハギア・ソフィア、東南エクセドラ床面を見下ろす。（筆者撮影1996科研）
27　図面：ハギア・ソフィア、身廊東部分の現状と復元平面図。（マンブーリによる Mamboury, Topographie. Tavola XLVIII.fig.1.）
28　写真：ハギア・ソフィア、南側廊と右端のベイを東北より望む。（メインストンによる Mainstone,Hagia Sophia.52. PL.59.）
29　写真：ハギア・ソフィア、南側廊東端部南壁体前の床面。（筆者撮影1996科研）
30　写真：ハギア・ソフィア、南側廊東端部南壁体中央の窓。（筆者撮影1996科研）
31　写真：ハギア・ソフィア、南側廊東端部南壁体西側の戸口。（筆者撮影1996科研）
32　写真：ハギア・ソフィア、北側廊東端部北側の戸口。（筆者撮影1996科研）
33　写真：ハギア・ソフィア、南側廊東南ピア脇の床面の痕跡。（メインストンによる Mainstone, Hagia Sophia. 225. PL.249.）
34　図面：ハギア・ソフィア、南側廊東南ピア脇の床面の痕跡と玉座周囲の障壁の復元。（マシューズによる Mathews,Early Churchs.96.fig.50.）
35　図面：ハギア・ソフィア、一階東南部分の現状平面図（部分）。（ヴァン・ナイスによる Van Nice, St.Sophia. PL.11.）
36　写真：ハギア・ソフィア、東側外観。（撮影 Raoul Laev, Archaeological Institute of Cologne. Kähler,Hagia Sophia. PL.28. より転載）
37　写真：ハギア・ソフィア、南ギャラリー東端の扉。（筆者撮影1996科研）
38　写真：ハギア・ソフィア、南ギャラリー東端の壁体。（筆者撮影1996科研）
39　図面：ハギア・ソフィア、ギャラリーレベル、現状の平面図。（ヴァン・ナイスによる Van Nice, St.Sophia. PL.2.）
40　写真：ハギア・ソフィア、南ギャラリー西側のピアの間の障壁。西側から見る。（メインストンによる Mainstone, Hagia Sophia.224. PL.248.）
41　写真：ハギア・ソフィア、南ギャラリーの障壁の開口上部の見上げ。（筆者撮影1996科研）
42　図面：ハギア・ソフィア、南ギャラリー中央部、現状の平面図。（ヴァン・ナイスによる Van Nice, St.Sophia. PL.18. ）

43　写真：ハギア・ソフィア、南ギャラリー、デエシス手前の床面。（筆者撮影1996科研）
44　写真：ハギア・ソフィア、デエシス手前の床面。（筆者撮影1996科研）
45　写真：ハギア・ソフィア、南ギャラリー中央部西側の開口。（筆者撮影1996科研）
46　写真：ハギア・ソフィア、南ギャラリー中央部西側開口部分の西端のパラペット。（筆者撮影1996科研）
47　写真：ハギア・ソフィア、南ギャラリー中央部東側の開口。（筆者撮影1996科研）
48　写真：ハギア・ソフィア、南ギャラリー中央部東側開口部分の東端のパラペット。（筆者撮影1996科研）
49　図面：ハギア・ソフィアの南ギャラリー、1710年のロースのスケッチ。（C.Loos, Nationalmuseum, Stockholm. Mainstone,Hagia Sophia.118. PL.146. から転載）
50　図面：ハギア・ソフィア、南ギャラリー西南部、現状の平面図。（ヴァン・ナイスによる Van Nice, St.Sophia. PL.20.）
51　写真：ハギア・ソフィア、西ギャラリーを北から南へ見る。突き当たりの扉がナルテックス前室上の部屋への入口。（撮影 Raoul Laev, Archaeological Institute of Cologne. Kähler,Hagia Sophia. PL.46. より転載）
52　写真：ハギア・ソフィア、スケウオフュラキオンの外観。北東から見る。（メインストンによる Mainstone,Hagia Sophia.138. PL.161.）
53　写真：ハギア・ソフィア、スケウオフュラキオンの内部。北側から南側を見る。（メインストンによる Mainstone, Hagia Sophia.139. PL.162.）
54　写真：現在のチェンベルリタシュ界隈を東から望む。（筆者撮影1996）
55　写真：東南からみたコンスタンティノスの記念柱。（筆者撮影1996）
56　地図：古典古代時代のビュザンティオン。（ジャナンによる Janin,CB.Carte No.II.）
57　地図：かつてのビュザンティオンとコンスタンティノス１世による新市街。（マンゴによる Mango,Developpement.Plan I.）
58　図面：1574年の無名の旅行者によるコンスタンティノス１世の記念柱のスケッチ。（Library of Trinity College, Cambridge. Mango,Studies.IV.PL.17. から転載）
59　図面：発掘調査に基づくコンスタンティノスの記念柱の平面図（左）と立面図（右）。（マンブーリによる German Archaeological Institute, Istanbul. Mango.Studies.IV.PL.18. から転載）
60　図面：コンスタンティノスの記念柱と聖コンスタンティノスの礼拝所の復元平面図。（マンゴによる Mango.Studies.IV.108.fig.1.）
61　図面：聖使徒教会の各復元案。それぞれa)ライナッハ:1896、b)ヴルフ:1898、c)ハイゼンベルク:1908、d)ヒュブシュ:1863、e)グルリット:1912、f)ソティリュー:1921/22、g)ベッティーニ:1946による。（Strube, Eingangsseite. Abb.63-64. から転載）
62　図面：聖使徒教会の復元案、縦断面図（上）と平面図（下）。（ヴルフによる O.Wulff, "Die Wunder von Byzanz und die Apostelkirche nach Konstantinos Rhodios", BZ 7(1898) 323. Strube, Eingangsseite. Abb.65. から転載）
63　図面：聖使徒教会の復元案、縦断面図（上）と平面図（下）。（ハイゼンベルクによる A.Heisenberg, *Grabeskirche und Apostelkirche, zwei Basiliken Konstantins. Zweiter Teil: Die Apostelkirche in Konstantinopel*, Leipzig, 1908. 113. fig.1. Tafel Va. Strube, Eingangsseite. Abb.66. から転載）
64　図面：聖使徒教会の復元案、縦断面図（上）と平面図（下）。（グルリットによる C.Gurlitt, *Die Baukunst Konstantinopels, I. Tafelband*, Berlin, 1912. 8.IV.V. Strube, Eingangsseite. Abb.67. から転載）
65　写真：１８世紀後半、ファティーフ・スルタン・メフメト・ジャーミー再建工事の際に発見され

た、６世紀の聖使徒教会のパラペットの断片。（筆者撮影1996 Istanbul Arkeoloji Müzesi, Env.5205T.）

66　写真：１８世紀後半、ファティーフ・スルタン・メフメト・ジャーミー再建工事の際に発見された、６世紀の聖使徒教会のフリーズの断片。（筆者撮影1996 Istanbul Arkeoloji Müzesi, Env.5202T.）

67　写真：ハギア・ソフィア大ドーム基部から見たカルコプラテイア地区。（筆者撮影1996科研）

68　写真：北から見たカルコプラテイアの聖母教会のアプスの外壁。（筆者撮影1996）

69　写真：東から見たゼイネップ・スルタン・ジャーミー通り。（筆者撮影1996）

70　図面：カルコプラテイアの聖母教会の配置図。（クライスによる W.Kleiss, "Neue Befunde zur Chalkopratenkirche in Istanbul", IM 15(1965) 149-157. Abb.1.）

71　図面：カルコプラテイアの聖母教会の発掘平面図。（クライスによる W.Kleiss, "Neue Befunde zur Chalkopratenkirche in Istanbul", IM 15(1965) 149-157. Abb.2.）

72　図面：カルコプラテイアの聖母教会の復元平面図。（クライスによる W.Kleiss, "Neue Befunde zur Chalkopratenkirche in Istanbul", IM 15(1965) 149-157. Abb.5.）

73　図面：カルコプラテイアの聖母教会の復元東立面図（上）と横断面図（下）。（クライスによる W.Kleiss, "Grabungen im Bereich der Chalkopratenkirche in Istanbul 1965", IM 16(1966) 217-240. Abb.15.）

74　図面：ベツレヘム、生誕教会の平面図、６世紀の建築（黒）と４世紀の基礎（斜線）。（ルスレによる M.Restlé, "Bethlehem", *Reallexikon zur byzantinischen Kunst I*, Stuttgart, 1966. 599-612. Abb.2. M.Kitschenberg, Die Kleeblattanlage von St. Maria im Kapitol zu Köln, Köln, 1990. Tafel 24 Abb.1. より転載）

75　図面：ケルン、ザンクト・マリア・イム・カピトール、１１世紀建設当初の復元平面図。（ラートゲンスによる H.Rahtgens, *Die Kirche S. Maria im Kapitol zu Köln*, Düsseldorf, 1913. 120.Abb.78. M.Kitschenberg, Die Kleeblattanlage von St. Maria im Kapitol zu Köln, Köln, 1990. Tafel 16. より転載）

76　写真：南東から見たハギオイ・セルギオス・カイ・バッコス。（筆者撮影1996）

77　写真：ハギオイ・セルギオス・カイ・バッコス、北立面東側部分。（筆者撮影1996）

78　写真：ハギオイ・セルギオス・カイ・バッコス、東北角。（筆者撮影1996）

79　写真：ハギオイ・セルギオス・カイ・バッコス、アプス北壁面と本体東壁面の取り合い。（筆者撮影1996）

80　写真：ハギオイ・セルギオス・カイ・バッコス、アプス北壁面。（筆者撮影1996）

81　図面：ハギオイ・セルギオス・カイ・バッコス、北立面図。（ティエルによる Ebersolt + Thiers, Eglises.PL.VII.）

82　図面：ハギオイ・セルギオス・カイ・バッコス、北立面図。（マシューズによる Mathews, Early Churches.49.fig.23.）

83　写真：ハギオイ・セルギオス・カイ・バッコス、西正面。（筆者撮影1996）

84　図面：ハギオイ・セルギオス・カイ・バッコス、一階平面図。（ティエルによる Ebersolt + Thiers,Eglises.PL.V.）

85　図面：ハギオイ・セルギオス・カイ・バッコス、二階平面図。（ティエルによる Ebersolt + Thiers,Eglises.PL.VI.）

86　図面：ハギオイ・セルギオス・カイ・バッコス、アイソメトリック図。（サンパオレシによる P.Sanpaolesi, "La chiesa dei ss.Sergio e Bacco a Constantinopoli", Rivista dell'Istituto nazionale d'archeologia e storia dell'arte, 10 (1961). 116-80. Mango,BA.59.fig.80. より転載）

87　写真：ハギオイ・セルギオス・カイ・バッコス、堂内アプスを西南より望む。（筆者撮影1996）

88　写真：ハギオイ・セルギオス・カイ・バッコス、堂内入口を東北より望む。（筆者撮影1996）

89　写真：ハギオイ・セルギオス・カイ・バッコス、堂内南東上方向を見上げる。（筆者撮影1996）

90　写真：ハギオイ・セルギオス・カイ・バッコス、南ギャラリーを東から西へ見る。（ミュラー＝ヴィーナーによる Müller-Wiener, Bildlexikon.183.Abb.192.）

91　写真：ハギオイ・セルギオス・カイ・バッコス、南ギャラリーを西から東へ見る。（ミュラー＝ヴィーナーによる Müller- Wiener, Bildlexikon.183.Abb.191.）

92　図面：ストゥーディオス修道院洗礼者教会、現状の配置と平面図。（ミュラー＝ヴィーナーによる Müller- Wiener, Bildlexikon.147.Abb.138.）

93　写真：ストゥーディオス修道院洗礼者教会、旧アトリウム側入口。（筆者撮影1992科研）

94　写真：ストゥーディオス修道院洗礼者教会、身廊アプスを西から見る。（筆者撮影1992科研）

95　写真：ストゥーディオス修道院洗礼者教会、身廊入口を東から見る。（筆者撮影1992科研）

96　写真：ストゥーディオス修道院洗礼者教会、身廊北側の列柱と側廊。（筆者撮影1992科研）

97　図面：大宮殿の復元平面図、ウベソルの説をもとにティエルが作図したもの。（J.Ebersolt, *Le Grand Palais de Constantinople et le Livre de Cérémonies*, Paris, 1910. H.Stierlin, *Encyclopedia of World Architecture*, Fribourg, 1977. 鈴木博之訳、『図集世界の建築（上）』、鹿島出版会、昭和54年、109頁より転載）

98　図面：大宮殿の復元平面図、ヴォクトによるもの。（Vogt,de cer.I.Commt.）

99　図面：大宮殿とその周辺の現存および発掘遺構。（マンブーリとヴィーガントによる E.Mamboury + T.Wiegand, Die Kaiserpaläste von Konstantinopel zwischen Hippodrom und Marmarameer, Berlin, 1934. Müller-Wiener, Bildlexikon.232.Abb.263. より転載）

100 図面：大宮殿の復元平面図。ギロンの説をもとにミランダが作図したもの。（Guilland, Topographie.）

用語一覧

本論文における『儀式について』の引用部分には、様々な分野の用語が登場する。訳文においてはわかりやすさよりも、単語の差による意味合いの違いを重視したために、多くの言葉は原語のまま残されている。以下にこれらの各単語について、五十音順に簡単に説明していくことにする。

アウグスタイオン(Augustaion, Augusteon/Αὐγουστάιον, Αὐγουστέον)

アウグスタイオンはハギア・ソフィアの南に位置した広場で、かつてのアゴラと同一の場所と思われる。コンスタンティノス１世によって建設されたと伝えられるが、『儀式について』に登場するのはユスティニアノス１世の改装後のものである。この広場は一般市民には開放されておらず、特定の人物しか立ち入ることはできなかった。アウグスタイオンにはユスティニアノスの騎馬像を戴く記念柱を中心とした、戦勝記念の彫像群があり、たびたび史料に言及されている。東端には元老院があり、後にマンナウラが同じ場所に建つことになったが、両者の建築的な相関関係、改築、改装などは不明である[1]。

アルギュロス(argyros/ἄργυρος)

財務を司る役職の一つで、詳細不明であるが皇帝の私的な財産の管理人とする説もある[2]。

アルトクリネース(artoklines, atreklines/ἀρτοκλίνης, ἀτρηκλίνης)

アルトクリネースはアトレークリネースともいい、皇帝主催の晩餐会の出席者やその席次を調整するのための役人である[3]。

アンテュパトス(anthypatos/ἀνθύπατος)

これは第６位の称号で、もともとラテン語のプロコンスルのギリシャ語訳で、特別な地域の行政長官を指すものであったが、名誉称号化した[4]。

---

[1] C.Mango,"Augustaion",ODB.232.
[2] Vogt,de cer.I.commt.64.
[3] Vogt,de cer.I.commt.84.
[4] ibid. A.Kazhdan,"Anthypatos",ODB.111.

移動式祭壇(antimision, antimension/ἀντιμισίον, ἀντιμήνσιον)

移動式祭壇というのは意訳で、原語ではアンティミシオン[1]あるいはアンティメーンシオン[2]で、語源的には ἀντι-mensa 、すなわち「祭壇に似た物」である。これは聖遺物入れの付いた聖別された布で、８世紀以降一般的になったが、現存するものがないために具体的な形状に関しては不明な点が多い[3]。

オイケイアコス(oikeiakos/οἰκειακός)

特定の役職を指す言葉で、語源的に考えて皇帝の私財の管理と関係があるようだが、法曹関係の職との見方もあり９・１０世紀における機能ははっきりしない[4]。

オスティアリオス(ostiarios/lt.ostiarius/ὀστιάριος)

本来は門番の意味であるが、後には転じて皇族に廷臣達を紹介する式部官的役割の宦官を指すようになった[5]。『儀式について』の引用部分においては、教会の役職名として登場しており、宮廷と類似の役割を負っていたものと思われる。

オッフィキアリオス(offikialios/ὀφφικιάλιος)

これは字義的には官職についている者を指すが、『儀式について』においては、そのうちの特定の部局の長を意味する。これは文官だけではなく、軍人なども含まれ、使われ方から考えて「その他の廷臣達」ぐらいの意味合いであることが多いようである[6]。

オルファノトロフェイオン(Orphanotropheion/Ὀρφανοτροφεῖον)

この地名は旧ビュザンティオンのアクロポリスから金角湾沿岸にかけての何処かを指すが、詳しいことは不明である[7]。

カストレーシオス(kastreisios/lt.comes et castrensis sacri palatii/ καστρήσιος)

---

[1] ἀντιμισίον 『儀式について』においてはこの言葉が一般的である。
[2] ἀντιμήνσιον こちらの方がより一般的かつもとの形に近い言葉である。
[3] A.Gonosová,"Antimension".ODB.112.
[4] A.Kazhdan,"Oikeiakos",ODB.1515.
[5] A.Kazhdan,"Ostiarios",ODB.1540.
[6] Vogt,de cer.I.commt.43.
[7] Janin,EM.399-400.

本来、宮廷の宦官で、宮中の晩餐会の食卓を担当していた者を指すが[8]、『儀式について』の引用部分においては、教会の役職名として登場しており、宮廷と類似の役割を負っていたものと思われる。

カルケー(Chalke/Χαλκῆ)

青銅門とも訳されるが大宮殿の正門で、青銅製の扉、あるいは青銅でふかれた屋根に由来する名前である。アナスタシオス１世が最初に建設したと伝えられるが、ユスティニアノス１世が再建しバシレイオス１世が修理した[2]。規模は不明だが四本のピアによってペンデンティヴ・ドームを支える構造だった[3]。

カルトゥーラリオス(chartoularios/χαρτουλάριος)

もともと宮廷の文書を担当する官吏を指す単語であり、後にはこの官吏は記録や財務を司るようになった。同様な仕事をおこなう役職を、教会ではカルトフュラクスというが、しばしば両者は混同される[4]。

儀式長官(epi tes katastaseos/ἐπὶ τῆς καταστάσεως)

原語ではエピ・テース・カタスタセオースである。この機能は明確で、皇帝主催の晩餐会の現場における責任者と考えられている。宮廷における地位等は諸説あるが、官職の一つを指し、シレンティアリオスの称号を持つクーブークリオンの立場にある宦官がなることが多いようである[5]。

クービクーラリオス(koubikoularios/lt.cubicularius/κουβικουλάριος)

宮中に使える宦官のうち、称号をもっているもの全般を指す言葉である。当時、クービクーラリオスは皇帝の文書や土地を管理したり、財務官などの宮中の要職をこなしたほか、行政官や軍人としても活躍した[6]。

クーブークリオン(kouboukliion, koubouklеion/κουβούκλιον, κουβούκλειον)

本来、「部屋付きの者」を意味し、皇帝の身の回りの世話、衣装、寝室などの管理を担当する宦官のことである[7]。

---

[8] A.Kazhdan,"Kastresios",ODB.1111-12.
[2] C.Mango,"Chalke",ODB.405-06.
[3] Krautheimer,ECBA.241-42.
[4] A.Kazhdan,"Chartoularios",ODB.416.
[5] A.Kazhdan,"Epi tes Katastaseos",ODB.722.
[6] A.Kazhdan,"Koubikoularios",ODB.1154.
[7] Vogt,de cer.I.commt.15-16.

クラニュディオン(chlanidion/χλανίδιον)

この言葉は語源的には「小さなクラミュス」を意味するが、具体的には何を指すのか不明である。おそらくマントの一種かと思われる。

クラミュス(chlamys/χλαμύς, χλανίς)

右肩でとめる形式の長いマントで、様々な色彩のものが使用された。特にタブリオンと呼ばれる方形の布を、二枚一組にして装飾としてクラミュスにつけるのが、宮廷人の間では一般的で、黄金のタブリオンをつけた紫のクラミュスは皇帝の代表的な礼服の一つであった[1]。

クリュソトリクリノス(Chrysotriklinos/Χρυσοτρίκλινος)

ユスティノス２世によって６世紀後半に建設された広間で、大宮殿での儀式において重要な位置を占めていた。クリュソトリクリノスとは黄金の広間を意味するが、八角形平面、ダブル・シェル構造のドームを持った広間で、黄金のモザイクで飾られ、黄金の食卓を備え、周囲を数多くの広間で囲まれていた。この建築物は皇帝の謁見、晩餐会、礼拝など数多くの儀式に使用され、『儀式について』においても最もよく言及される建築物の一つである[2]。

孤児(orphanon/ὀρφανόν)

『儀式について』でたびたび言及される「孤児」が、教会の組織内で実際どのような存在を指すのか不明だが、孤児達からなる聖歌隊との説もある。

サギオン(sagion/lt.sagum/σαγίον)

これは外套に対して広く使用された単語である。『儀式について』で言及されているものに関しても様々な説があるが、クラミュスよりも短い略礼服的なマントであったとするのが一般的なようである[3]。

ジザキオン(tzitzakion/τζιτζάκιον)

服の一種で７世紀以降に登場した儀式用のものであるが、具体的なことは不明である[4]。

---

[1] A.Kazhdan+N.P.Sevcenko,"Chlamys",ODB.424.N.P.Sevcenko,"Tablion",ODB.2004.
[2] A.Kazhdan,"Chrysotriklinos",ODB.455-56.
[3] A.Kazhdan,"Sagion",ODB.1827-28.
[4] Vogt,de cer.I.commt.69.

シレンティアリオス(silentiarios/σιλεντιάριος)

この単語が史料に登場するのは４世紀始めのことである。もともと「静謐」を意味するラテン語に語源を持つこの言葉は、宮殿内の秩序を保つ係を指していた。６世紀にはこの役人の職務は、式部官、警護官的なものに拡張されたが、９・１０世紀には単なる名誉職となり、『クレートロロギオン』では第１７位の称号として登場する[1]。

シュンクレートス(synkletos/σύγκλητος)

これはいわゆる元老院のことで、コンスタンティノポリスにはコンスタンティノス１世によって設立された。しかし９、１０世紀においてはかつての政治的、社会的な意味は失われ、皇帝への助言と宮廷の儀式への参加が主な役割となっていた。また元老院議員はシュンクレーティコス(synkletikos/συγκλητικός)と呼ばれるが、この時代にあっては、古代共和制ローマと異なり単なる役人の集まりであった[2]。またいくつかの称号は元老院に属するものであることが知られている。

シュンケルロス(synkellos/σύγκελλος)

この言葉は語源的には「同室の人」を指し、転じて総主教の顧問官、補佐官を指すようになった。[3]

スカラマンギオン(skaramangion/σκαραμάγγιον)

儀式の際に着用される服としては、最も一般的なものである。これは長袖の裾の長いテュニカで、裾に切り込みが入っており、ベルトと共に着用される。皇帝の衣装としては金糸の刺繍のある白のスカラマンギオンがよく登場する[4]。

ストラテーゴス(strategos/στρατηγός)

もともと「将軍」を意味する言葉であったが、遅くとも８世紀にはテマの長官を指すようになった。ビュザンツ帝国は領土をテマと呼ばれる州に分けて統治した。テマ制は、この言葉がかつては「軍団」を意味したことからもわかるように、軍団長が各担当地域の行政責任者も兼ねる制度で、軍団の兵士が一種の屯田兵として土地に定着することで、遅くとも１０世紀初頭に完成された。テマの数は時代によって異なる

[1] A.Kazhdan,"Silentiarios",ODB.1896.
[2] A.Kazhdan,"Senate",ODB.1868. A.Kazhdan,"Senator",ODB.1869.
[3] A.Papadakis,"Synkellos",ODB.1993-94.
[4] N.P.Sevcenko,"Skaramangion",ODB.1908.

が、コンスタンティノス７世は『テマについて』[5]のなかで３１という数字をあげている。また『クレートロロギオン』はストラテーゴスを２６人としている。

スパタロカンディダートス(spatharokandidatos/σπαθαροκανδιδάτος)

これは語源的には「スパタリオス」と「カンディダートス」の合成語で、白い制服を着用した特別な護衛兵を意味した。『クレートロロギオン』においては第１０位の称号だが、軍事に関連する職についているものに与えられることが多かった[2]。

タ・カニクレイウー(ta Kanikleiou/τὰ Κανικλείου)

この地名は秘書官（ホ・エピ・トゥー・カニクレイウー）という単語に由来する。位置はおそらく現在のシュレイマン・ジャーミーの北の金角湾沿いの何処かであろう[3]。

タ・スフォーラキウー（スフォーラキオス地区）(ta Sphorakiou/τὰ Σφωρακίου)

これは人名に由来する地名でミリオンからフォロスへ行くメセーの北側を指す[4]。

タ・ダレイウー（ダレイオス地区）(ta Dareiou/τὰ Δαρείου)

この地名は聖ソフィア港、聖セルギオスと聖バッコスの教会とヒッポドロモスの近く、マルマラ海から少し入ったあたりの街区を指し、隣りにタ・バシリスクー（バシリスコス地区）があった[5]。

タ・ナルスー（ナルセス地区）(ta Narsou/τὰ Ναρσοῦ)

この地名も人名に由来するが、市内のどのあたりをさすのかは諸説あり、現在のシュレイマン・ジャーミーの北東の一帯だとする説が有力である[6]。

タ・パウリヌー（パウリヌス地区）(ta Paulinou/τὰ Παυλίνου)

[5] "De thematibus" ここでは以下のものによる。井上、ビザンツ59-84、A.Kazhdan,"Strategos",ODB.1964.
[2] A.Kazhdan,"Spatharokandidatos",ODB.1936.,Idem.,"Kandidatos", ODB.1100.
[3] Janin,CB.365-66.
[4] Janin, EM. 440-441.
[5] Janin,CB. 319-20,334-35.Janin,EM. 284-85.
[6] Janin,CB.395-96.

テオドシウス２世の幼なじみにちなんだ地名で、市壁の外、現在のエユップの丘の上である[7]。

タ・バシリスクー（バシリスコス地区）(ta Basiliskou/τὰ Βασιλισκοῦ)

この地名は聖ソフィア港、聖セルギオスと聖バッコスの教会とヒッポドロモスの近く、マルマラ海から少し入ったあたりの街区を指し、隣りにタ・ダレイウー（ダレイオス地区）があった[2]。

ディイッピオン(Diïppion/Διΐππιον)

メセーの始まるあたりからヒッポドロモスにかけての、大宮殿やハギア・ソフィアの近くの街区のことである[3]。

ディベーテーシオン(divetesion/διβητήσιον, διβιτίσιον)

最も格式の高い礼服で、スカラマンギオンのかわりにクラミュスの下に着用される。形はダルマティカに似たテュニカの一種で、ベルトと共に着用されるが、スカラマンギオンとの区別は容易ではない[4]。

デウテロン(Deuteron/Δεύτερον)

コンスタンティノスの市壁とテオドシウスのそれとのあいだ、メセーに沿ったあたりの街区のことと思われる[5]。

テトラセロン(tetraseron/τετρασέρον)

皇帝が福音書の朗読を聞くときに使用した空間。名称の由来に関しては諸説ある。

デーマルコス(damarchos/δήμαρχος)

官職の一種で『儀式について』においては「都市の」青党と「都市の」緑党を率いる職である[6]。

デーモス(demos/δῆμος)

この言葉はローマ帝政時代の戦車競争の応援団に起源を持つ、青、緑、白、赤の各党派のことを意味し、

[7] Janin,CB.463.
[2] Janin,CB. 319-20,334-35.Janin,EM. 284-85.
[3] Janin,CB. 342-43. Janin,EM. 264-67.
[4] N.P.Sevcenko,"Divetesion",ODB.639.
[5] Janin,EM.89-90.
[6] A.Kazhdan,"Demarchos",ODB.602-03.

９・１０世紀においてはブライポシトスから給料を受け取り、儀式の際に皇帝に歓呼する組織化された存在であった[1]。

ドメスティコス(domestikos/δομέστικος)

中央の皇帝直属の軍団の司令官を指す言葉で、スコライ軍団長（ドメスティコス・トーン・スコローン）(domestikos ton Scholon/δομέστικος τῶν Σχολῶν)とエクスクービテース軍団長（ドメスティコス・トーン・エクスクービトーン）(domestikos ton Exkoubiton/δομέστικος τῶν Ἐξκουβίτων)は儀式の際には、それぞれ「郊外の（ペラティコイ）(peratikoi/περατικόι)」青党と「郊外の」緑党を率いることになっていた[2]。

ノタリオス(notarios/lt.notarius/νοτάριος)

これは職業名で、西欧の公証人に近い存在で法律関係の書類の管理を仕事にしていた。７世紀以降「帝室公証人」ともいうべき制度ができた。彼等の同業者組合は政府の外郭団体として機能し、宮中の儀式にも参加した。一方の通常の公証人達も宮廷において、書記官や秘書官として活動した[3]。

パトリキオス(patrikios/lt.patricius/πατρίκιος)

パトリキオスはローマ共和制期に貴族を意味した言葉（パトリキウス）に起源をもち、４世紀にはすでに宮廷の名誉称号となった。９世紀には位階の第７位におかれ、行政や軍事の要職にあるものに与えられた[4]。

バシリコイ・アントロポイ(basilikoi anthropoi/βασιλικοὶ ἄνθρωποι)

もともと「皇帝の男達」を意味し、広義には皇帝に使え従うものすべてを指し、「その他の家来」程度の意味合いでもよく史料に登場する。また狭義には身分の低い皇帝の召使を指すが、衛兵の一隊を指すという説もあり、具体的な使用範囲は確かではない[5]。

パラキュプティコン(parakyptikon/παρακυπτικόν)

[1] M.McCormick,"Demoi",ODB.608-09.Idem.,"Factions",ODB.773-74.
[2] A.Kazhdan,"Domestikos",ODB.646.
[3] A.Kazhdan+A.Cutler,"Notary",ODB.1494.
[4] A.Kazhdan,"Patrikios",ODB.1600.
[5] A.Kazhdan,"Basilikoi Anthropoi",ODB.265.

本来「覗き見るための場所」を意味し、教会内においては、ギャラリーに身廊を見下ろす形で設置された皇帝用の礼拝所を指す。

ブーコレオン(Boukoleon/Βουκολέων)

この名前は牛と獅子の像が立っていたことに由来し、大宮殿西側の海に面した地域を指す。ここには「ユスティニアノスの館」と呼ばれる宮殿や皇帝用の港湾設備があったことで知られている[1]。

プライポシトス(praipositos/πραιπόσιτος)

これはローマ帝政末の「神聖な寝所の長（プラエポシトゥス・サクリ・クービクリ）(praepositus sacri cubiculi)」に起源を持つ、いうなれば侍従長である。かつては宮中の宦官の長を指したが、9世紀には宮中儀式担当の宦官の長を指すようになった[2]。

ブラケルナイ(Blachernai/Βλαχέρναι)

コンスタンティノポリスの北西の角、テオドシウスの市壁が金角湾につきあたるあたりを指す地名である。聖母の教会のほか宮殿があったことで知られる[3]。

プロセウカディオン(proseuchadion/προσευχαδίον)

皇帝が礼拝に参加するときに使用した空間。語源的には「礼拝者のための場所」を意味する。礼拝所的機能と控室的機能を合わせ持っていたと思われる。

プロートスパタリオス(protospatharios/πρωτοσπαθάριος)

この言葉はもともと「宦官の護衛兵（スパタリオス）の長」を意味するが、遅くとも８世紀には称号となり、９世紀の『クレートロロギオン』では第８位に位置付けられていた。この称号は通常、元老院議員やテマの長官（州の行政と軍事の責任者）にあたえられ、１０世紀には「髭の」（去勢されていない）プロートスパタリオスと宦官のそれとに区別されていた[4]。

---

[1] A.Kazhdan,"Boukoleon",ODB.317.
[2] A.Kazhdan,"Praepositus sacri cubiculi",ODB.1709.
[3] Janin,CB.123-28. Janin,EM.161-71. Müller-Wiener,Bildlexikon. 223-. C.Mango,"Blacernai, Church and Palace of",ODB.293.
[4] 井上、ビザンツ124-26、A.Kazhdan,"Protospatharios",ODB.1748.

ヘーグーメノス(heroumenos/ἡγούμενος)

修道院内で選出される指導的立場の修道僧のことで、実質上の修道院長のこと[1]。

ベステートール（ベスティトール）(vestitor, vestetor/βεστίτωρ, βεστήτωρ)

この単語はもともと、シレンティアリオスと共にプライポシトスの下に位置する役人を指すものであった。『クレートロロギオン』には第１６位の称号として登場するが、『儀式について』ではプライポシトスを補佐し皇帝の着替えの手伝いをしていたことがわかり、９・１０世紀における実体は今一つはっきりしない[2]。おそらく、実際に衣装の管理などの職についていたのではなく、『儀式について』の記述は多分に象徴的な行為を指すものと思われる。

ヘタイレイア(hetaireia/ἑταιρεία)

この言葉は１０世紀においては、外国人傭兵で構成された皇帝の護衛隊を意味し、少なくとも三つの異なる部隊があったと考えられている[3]。

ペトリオン(Petrion/Πετρίον)

これは人名（ペトロス）に由来する地名で、金角湾沿い、現在スルタン・セリム・ジャーミーがあるあたりから海にかけてである[4]。

ベーマ(bema/βῆμα)

ベーマとは語源的には「一段高い所」の意味で、教会建築においては祭壇の周囲の空間をさす。これはビュザンツ建築では堂内東端部のアプスを中心とした、身廊から障壁で切り取られた空間を差し、通常、至聖所と同一視される[5]。

マギストロス(magistros/μάγιστρος)

４世紀には中央政府の行政長官を意味したが、１０世紀には形骸化して第５位の称号となり１２人から２４人のマギストロスがいた[6]。

---

[1] A.M.Talbot+A.Kazhdan,"Hegoumenos",ODB.907-08.
[2] A.Kazhdan,"Vestitor",ODB.2164.
[3] A.Kazhdan,"Hetaireia",ODB.925.
[4] Janin,CB.407-08.
[5] M.J.Johnson,"Bema",ODB.281.
[6] 井上、ビザンツ124-26、A.Kazhdan,"Magistros",ODB.1267.

マングラビオン(manglabion/μαγλαβίον)

剣で武装した皇帝の護衛兵の一部隊の名称で、構成員はマングラビテース(manglabites/μαγλαβίτης)と呼ばれる。彼等は儀式において皇帝を先導し、また宮殿の門を管理していたことでも知られる。また最も皇帝の身近で勤務していたことから、たびたび陰謀事件にも関与した[1]。

マンナウラ(Mannaura, Magnaura/lt.magna aula/Μανναύρα, Μαγναύρα)

マンナウラはマグナウラともいいラテン語で「大きな広間」を意味する「マグナ・アウラ」の訛ったものである。この建物は大宮殿の東北のはずれに建っており、ギャラリーを持つ三廊式のバシリカである。身廊中央軸線上東端部にアプスがあり、ここに「ソロモンの玉座」という皇帝の玉座がおかれていた。この建物は、外国大使の謁見、民衆への演説などに使用された[2]。

ミリオン(Milion/Μίλιον)

メセーの起点に置かれた一種の基準点である。残念なことに正確な位置は不明であるが、アウグスタイオンの何処か、ハギア・ソフィアの近くと考えられている。建築的には四つのアーチによって支えられたドームを戴く構造を持ち、多くの彫像によって飾られていた[3]。ちなみに名前は当時の長さの単位に由来し、1ミリオン=1000パッススだが、現在の長さに換算する場合は諸説あり、1312mから1574mの間となる[4]。

メセー(Mese/Μέση)

メセーとはもともと「中央」を意味する言葉であるが、文字通りミリオンから始まりコンスタンティノポリスの中央を貫いていた通りのことでもある。この通りはフィラデルフィオンで二つに別れ、一つは北西にキリアコス門まで延び、もう一つは南西に続いて黄金門に至っていた。この通りは本論文でもみてきたように、儀式の舞台として政治的、宗教的にも重要であっただけでなく、列柱廊を持ち商店が立ち並び、経済的にも中心的な意味を持っていた。

---

1) A.Kazhdan,"Manglabites",ODB.1284.
2) C.Mango,"Magnaula",ODB.1267-68.
3) A.Kazhdan,"Mese",ODB.1346-47.
4) E.Schilbach,"Milion",ODB.1373.

メータトーリオン(metatorion/μητατώριον)

皇帝が教会の儀式に参加したときの控え室のこと。休憩室、更衣室、食堂として使用された。

ユスティニアノス(のトリクリノス)(Justinianos/Ἰουστινιανός)

ユスティニアノスと通常呼ばれる大宮殿内のこのトリクリノスは、ユスティニアノス2世によって694年に建設された。このモザイクで飾られた大広間、字義通りに言えば大食堂、は政治的な会議をおこなう場所として使用されたが、それ以上に『儀式について』においては、大宮殿内を皇帝の行列が通る際に通過する場所として言及される[1]。

ラウシアコス(Lausiakos/Λαυσιακός)

大宮殿内の広間、あるいは食堂の一つで、クリュソトリクリノスやユスティニアノスのトリクリノスの近くに位置していた。ユスティニアノス2世によって建設され、皇帝の私的な空間としての性格が比較的強かったようだが、時には国事や神学の議論にも使用された[2]。

レフェレンダリオス(referendarios/lt.referendarius/ῥεφερενδάριος)

もともとは皇帝と廷臣達の間の連絡を担当する官吏を指す言葉であったが、教会においては皇帝と総主教の間の連絡を担当する聖職者を指す[3]。

---

1) A.Kazhdan,"Triklinos of Justinian",ODB.2116.
2) A.Kazhdan,"Lausiakos",ODB.1189.
3) A.Kazhdan+P.Magdalino,"Referendarios",ODB.1778.

あとがき

本研究は東京大学教授鈴木博之先生の指導のもとでおこなわれたものである。先生には卒業論文から博士論文の審査に至るまで、一貫して指導を受け、建築史研究のありかたについて多くの点を教えていただいた。まず先生に感謝を込めて御礼申し上げたい。また研究室では、助教授の藤井恵介先生、伊藤毅先生、元教授の大河直躬先生から、研究の視野を広げるうえで大いなる刺激を受けたことを深く感謝している。

この間、1993年から95年にかけてドイツ学術交流会の援助のもと、マインツ大学教授ウルス・ペシュロウ先生のもとに留学する機会に恵まれたが、このときの経験も本研究において重要な意味を持っている。このような機会を与えてくれたドイツ学術交流会と、異国からの学生を温かく迎えてくれたペシュロウ先生に御礼申し上げたい。

そして1990年、92年、96年と三回に渡って文部省科学研究助成金による「ハギア・ソフィア大聖堂学術調査」に参加させていただいた。この調査においてご一緒させていただいた諸先生方、とくに調査団の責任者でもある筑波大学助教授日高健一郎先生、そして名古屋大学名誉教授飯田喜四郎先生、大同工業大学助教授佐藤達生先生、淑徳女子大学助教授河辺泰宏先生、また日本のビュザンツ建築史の先達でもある東京工業大学助教授篠野志郎先生には、遺構を前に貴重なご意見をいただくと同時に、資料等の便宜も計っていただき感謝の言葉もない。望外の好運とも言うべきこの経験に、本研究が負っている部分は計り知れないものがある。ここにあつく御礼申し上げたい。

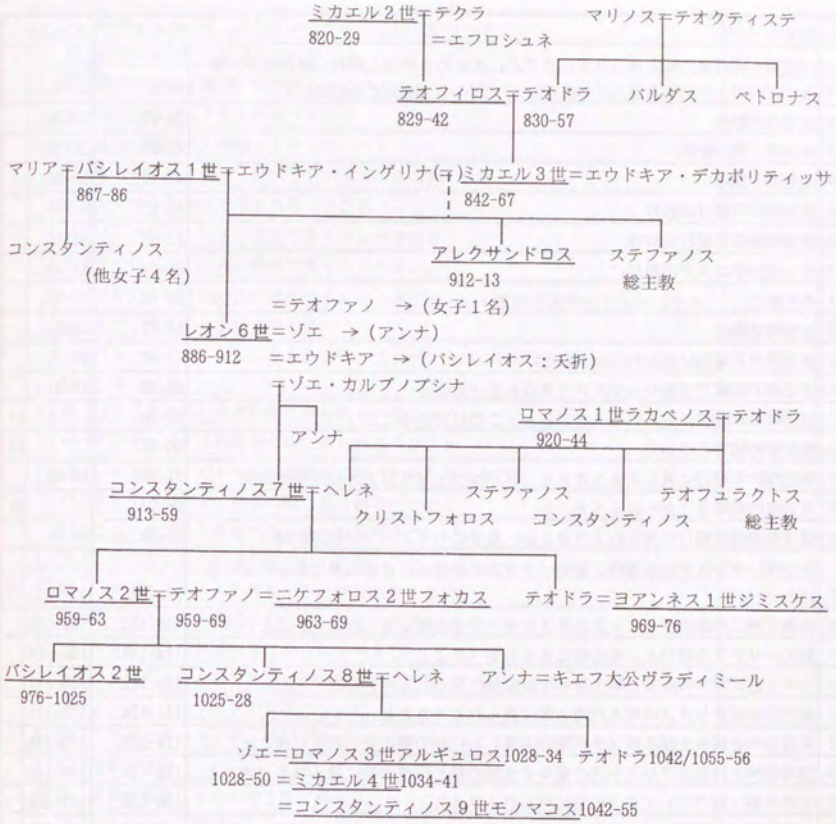
最後になったが、日々の研究生活を支えてくれた院生諸氏、友人や家族に、そしてその惜しみない助力に心から感謝する。

1997年３月

表

目次

［表0］アモリア朝並びにマケドニア朝歴代皇帝の系図
［表１］『儀式について』各章の主題・概略
［表２］『儀式について』各章の主題（第１巻第１章から第３５章まで）
［表３］『儀式について』第２巻の関連部分
［表４］不動暦に属する儀式
［表５］動暦に属する儀式
［表６］『クレートロロギオン』で取り上げられている宗教儀式
［表７］当時の各祭日とその登場する史料
［表８］教会間の行進
［表９］各儀礼における皇帝の行動
［表１０］各教会の沿革
［表１１］各教会の形態
［表１２］教会内の礼拝所の使用



［表0］アモリア朝並びにマケドニア朝歴代皇帝の系図

(D.M.Nicol, *A Biographical Dictionary of the Byzantine Empire*, London. 1991. xix-xx. Table IV-V. A.Kazhdan,"Macedonian Dynasty", ODB. 1262-63.)

下線が皇帝

ゴシック体がマケドニア朝の正統な皇帝

数字は在位期間

をそれぞれあらわす

巻	章	題名	ライスケ	ヴォクト
1	1	大教会への行進の際に見られるべきこと、すなわち序列と儀礼、皇帝達が大教会へと向かう際に引き連れていた輝かしく華々しい随員たちについて	5-35.	3-28.
1	2	聖誕祭の歓呼	35-41.	29-34.
1	3	神現祭：党の歓呼	41-43.	35-37.
1	4	復活祭の歓呼	43-46.	38-40.
1	5	復活祭の月曜日の歓呼	47-52.	41-45.
1	6	復活祭後の日曜日の歓呼	52-53.	46-47.
1	7	メソペンテコステの祭日に	53-54.	48-49.
1	8	昇天祭に	54-58.	50-53.
1	9	聖霊降臨祭に	58-71.	54-64.
1	10	復活祭の月曜日に見られるべきこと	71-86.	65-77.
1	11	復活祭の火曜日に聖セルギオスで見られるべきこと	86-89.	78-81.
1	12	復活祭の水曜日に見られるべきことと、この日にやること	89-90.	82
1	13	総主教の招待について	90-91.	83
1	14	復活祭の木曜日に見られるべきこと、クリュソトリクリノスでの接吻の儀	91-96.	84-88.
1	15	復活祭の金曜日に見られるべきこと	96-97.	89
1	16	復活祭後の日曜日に見られるべきこと、皇帝のハギア・ソフィア訪問	97-98.	90-91.
1	17	メソペンテコステの水曜日、聖モーキオスの神殿への行進の際に見られるべきこと	98-108.	92-100.
1	18	我等が神、神聖なクリストスの昇天の祭と行進の際に見られるべきこと	108-114.	101-105.
1	19	聖エーリアスの前日と、その祭に見られるべきこと	114-118.	106-109.
1	20	５月１日、ネアの献堂、新大教会の献堂祭に見られるべきこと	118-121.	110-112.
1	21	聖デーメートリオスの祭と行進の際に見られるべきこと	121-124.	113-115.
1	22	貴重な木を持ち上げる祭（十字架挙栄祭）と行進の際に見られるべきこと	124-128.	116-118.
1	23	我等が神、神聖なクリストスの聖なる生誕の祭と行進の際に見られるべきこと	128-136.	119-126.
1	24	１月１日、聖バシレイオスの日に見られるべきこと	136-139.	127-129.
1	25	神聖な光（神現祭）の前日に見られるべきこと	139-143.	130-132.
1	26	光の祭（神現祭）と行進の際に見られるべきこと	143-147.	133-136.
1	27	ヒュパパンテの祭（進堂祭）と行進の際に見られるべきこと	147-156.	137-144.
1	28	正統信仰の祭に見られるべきこと	156-160.	145-148.
1	29	四旬節第三週の日曜日、十字架の価値ある命ある木の礼拝の時に見られるべきこと	161-162.	149-150.
1	30	最高に神聖な聖母の受胎告知の祭と四旬節第三週の日曜日が重なった時に見られるべきこと	162-170.	151-157.
1	31	聖枝祭の前日に見られるべきこと	170-171.	158-159.
1	32	聖枝祭とその行進の際に見られるべきこと	171-177.	160-164.
1	33	大木曜日に見られるべきこと、皇帝の養老院訪問について	177-178.	165-166.
1	34	大金曜日に見られるべきことと、その日にやること	178-180.	167-168.
1	35	聖大土曜日に見られるべきこと	180-186.	169-173.
1	36	教会和解の行進で見られるべきこと	186-187.	174

1	37	祭典と行進の際に皇帝が着るものについて知るべきこと	187-191.	175-179.
1	38	皇帝の戴冠式で見られるべきこと	191-196.	1-5.
1	39	皇帝の結婚（戴冠）式で見られるべきこと	196-202.	6-10.
1	40	皇后の戴冠式で見られるべきこと	202-207.	11-15.
1	41	皇后の戴冠式と結婚式で見られるべきこと	207-216.	16-23.
1	42	紫の生まれの幼児（皇太子）の出産の際の党の歓呼	216-217.	24-25.
1	43	カイサルの選出で見られるべきこと	217-225.	26-32.
1	44	ノーベレーシモスの選出で見られるべきこと	225-229.	33-36.
1	45	クーロパラテースの昇進で見られるべきこと	229-231.	37-39.
1	46	マギストロスの昇進の際に見られるべきこと、もし皇帝が大教会で盛大にそれをおこなうことを命じたとき	231-236.	40-43.
1	47	パトリキオス、シュンクレートス、ストラテーゴスの昇進の際に見られるべきこと	236-244.	44-50.
1	48	パトリキオスの昇進の際に見られるべきこと	244-255.	51-60.
1	49	アンテュパトスの昇進の際に見られるべきこと	255-257.	61-62.
1	50	ゾーステー・パトリキアの昇進の際に見られるべきこと	257-261.	63-66.
1	51	プライポシトスの昇進の際に見られるべきこと	261-263.	67-68.
1	52	ヒュパルコスの昇進の際に見られるべきこと	263-265.	69-73.
1	53	ヒュパルコスの昇進の際の党の歓呼	265-268.	
1	54	コイアイストールの昇進の際に見られるべきこと	268-269.	74
1	55	デーマルコスの昇進の際に見られるべきこと	269-271.	75-79.
1	56	デウテロスの昇進の際に見られるべきこと	272	80
1	57	シュンポノスとロゴテテースの昇進の際に見られるべきこと	273-274.	81
1	58	アンティグラフェアの昇進について	274-275.	82
1	59	スパタロカンディダトスがプロートスパタリオスになる時に見られるべきこと	275	83
1	60	皇帝の埋葬	275-276.	84-85.
1	61	皇帝の誕生日を毎年祝う際に見られるべきこと	277-278.	86-87.
1	62	デクシモス（歓迎会）の前日に見られるべきこと	278-280.	88-89.
1	63	翌日、デクシモス（歓迎会）で見られるべきこと	280-284.	90-93.
1	64	復活祭後の日曜日の週の月曜日に黄金のヒッポドロモスでのデクシモスで見られるべきこと	284-293.	94-101.
1	65	サクシモン、つまり宴席で見られるべきこと	293-296	102-104.
1	66	冬、強風下での、トリコンクの神秘の水盤でおこなわれる、通常水盤でおこなわれるときには許されない、デクシモスで見られるべきこと	296-302.	105-109.
1	67	大水盤で行われるそれぞれのデクシモスでの、すべての高官達の秩序と役割について	301-303.	110-111.
1	68	黄金のヒッポドロモスとそこでおこなわれることについて	303-310.	112-117.
1	69	決まった日におこなわれるレースの際に見られるべきこと	310-340.	118-142.
1	70	５月１１日、神に守られた帝都の創建祭でおこなわれるレース	340-349.	143-150.
1	71	ファクラレア（松明のレース）が行われる際に見られるべきこと	349-359.	151-159.
1	72	ボトン（祈願文）について、何がおこなわれるべきか	359-	160-163.

1	73	謝肉際でのヒッポドロモス、ルーベルカリオスと呼ばれるもの（レース）について	364-369.	164-170.
1	74	皇帝達が大教会に行進する際にコイアイストールのカンケルラリオス達がラテン語であげる歓声	369-370.	169-170.
1	75	１９寝台（の間）の食卓でブーカリオス達があげる歓声の表	370-371.	171-172.
1	76	（軍隊の）野営地で午前に叫ぶ称賛（の言葉）	372	173
1	77	支配者が敵に対する戦勝を祝う際に（軍隊の）野営地で言う称賛（の言葉）	372-373.	174
1	78	葡萄の収穫の日に見られるべきこと、ヒエレイアからの退出	373-375	175-176.
1	79	聖枝祭の日曜日にヒュパルコス達が殉教者聖ローマノスの神殿に行く際の歓呼	376	177
1	80	ガリラヤの第三日にデーマルコスを讃える際に見られるべきこと	377-379.	178-179.
1	81	婚約式で見られるべきこと	379	180
1	82	結婚式で見られるべきこと	380	181
1	83	１９寝台（の間）でのゴッティコンと呼ばれる晩餐会の際に見られるべきこと	381-384.	182-185.
1	84	ペトロス・マギストロスによる「アドミンシオノンとスコレーのコメートスとコーロパラトスの昇進の際に見られるべきこと」	386-387.	
1	85	同じペトロスの「アウグースタリオスないしアンテュパトスを作る際に見られるべきこと」	388	
1	86	軍隊の不服従について、発見に十分なほど強力な場合、如何にそれをまとめ、各々の受け皿を準備のするのか	389-393.	
1	87	西の皇帝が上の部分で出した布告を持って来た月桂冠を着けた使者を帝国のここの皇帝が歓迎する際に見られるべきこと、そして彼の帝国の安全と大使の自由について	393-396.	
1	88	大使を歓迎しようとする際の皇帝の安全と彼の自由について見られるべきこと	396-368.	
1	89	大ペルシャの大使の到着の際に見られるべきこと	398-408.	
1	90	他の日の大使の訪問の際に見られるべきこと	408-410.	
1	91	天命を受けた皇帝レオーンの布告	410-417.	
1	92	天命を受けた皇帝アナスタシオスの布告	417-425.	
1	93	天命を受けた皇帝ユースティノスの布告	426-430.	
1	94	小レオーンの布告	431-432.	
1	95	最も信心深い我等が主人ユースティニアノスの布告	432-433.	
1	96	スコレー軍団長から昇進したキリストの友、最も勇敢な皇帝ニケフォロスの布告	433-440.	
1	97	全シュンクレートスの第一人者の昇進に	440-443.	
2	1	宮殿が開かれ行進がおこなわれる日には必ず見られるべきこと	518-522.	
2	2	日曜日に行進をおこなう際に見られるべきこと	522-525.	
2	3	皇帝がドメスティコン・トーン・スコローンやストラテゴス、ドルーンガリオン・トーン・プロイモーン、サケッラリオン、サケッリオスの者、ロイプース・オッフィキアリウースを作る時に見られるべきこと	525-528.	
2	4	ライクトールの昇進の際に見られるべきこと	528-530.	
2	5	シュンケッリオスの昇進の際に見られるべきこと	530-532.	
2	6	聖大コーンスタンティノスの記念祭とボノスの新宮殿の価値ある十字架の建設記念祭をおこなうに際して見られるべきこと	532-535.	

2	7	万聖人の祭と行進の際に見られるべきこと	535-538.	
2	8	８月１日、価値高く生宿る十字架の提示される際に目撃されるべきこと	538-541.	
2	9	神聖の極み、神の母の御就寝の祭、８月１５日に目撃されるべきこと	541-545.	
2	10	四旬節第一週月曜日、皇帝がマンナウラで壮麗に演説する際に見られるべきこと	545-549.	
2	11	神聖な四旬節中の週に価値ある十字架が公開される際に目撃されるべきこと	549-551.	
2	12	皇帝がブラケルナイに沐浴に行く際に目撃されるべきこと	551-557.	
2	13	特定の日曜日、あるいは他の共同体の日、皇帝が聖使徒かあるいはほかの神殿を礼拝のために訪れる際に目撃されるべきこと	557-563.	
2	14	コーンスタンティノポリス総主教の選出の際に見られるべきこと	564	
2	15	マンナウラの大トリクリノスで皇帝がソロモンの玉座に座している際に見られるべきこと・・・（946年のタルソスの大使の謁見と957年のオリガのそれ）	564-598.	
2	16	四つのタグマタの長官達がヒッポドロモスに登場する際に見られるべきこと（途中まで）	598-599.	
2	17	皇帝コーンスタンティノスの息子、紫の生まれのローマノス（2世）の（戴冠の際の）布告	（散逸）	
2	18	大きなあるいは小さな皇帝達と皇后達のブルーマリオンをおこなう際に見られるべきこと（途中から）	599-607.	
2	19	フォロスで行進を伴って敵に対する戦勝を祝う際にやるべきこと	607-612.	
2	20	ヒッポドロモスで敵に対する戦勝を祝う際に見られるべきこと	612-615.	
2	21	皇帝に男の子が生まれたときに見られるべきこと	615-619.	
2	22	皇帝の男の子の洗礼の時に見られるべきこと	619-620.	
2	23	皇帝の男の子の（最初の）散髪の時に見られるべきこと	620-622.	
2	24	クービクーラリオスの昇進に	622-624.	
2	25	クービクーラリオスの昇進で見られるべきこと	624-627.	
2	26	宮殿の近くの大教会で慣例に則って行なわれることを、異なる機会の取り決めで変えることについて	627	
2	27	（小）ヘーラクリオスが、自分の父によってカイサルの位階からバシレイオスの身分にあげられたこと、そして彼の兄弟ダビドがカイサルになったこと	627-628.	
2	28	大教会への行進について	628-629.	
2	29	ヒッポドロモスの（儀式の）日にヘーラクリオスがシュンクレートスの者達と総主教の登場を歓迎したこと	629-630.	
2	30	総主教の死について	630-631.	
2	31	皇帝が大教会に持っていった献納品のこと	631	
2	32	二つの党のデクシモスの要求について	631-632.	
2	33	即位、戴冠、誕生、結婚の日における官位の昇進について	632	
2	34	誕生日や他の同様の日における官位の昇進について	632-633.	
2	35	サクシモンについて	633	
2	36	ヒッポドロモス（での儀式）の日にエパルコスの入場	634	
2	37	反乱をおこし再び捕えられた者について、皇帝の対応	634-635.	
2	38	最も神聖な総主教テオフュラクトスの選挙について	635-636.	
2	39	総主教が自分の宮殿で使っている侍従について	637	

2	40	復活祭の聖大日曜日に、皇帝、マギストロス、アンテュパトス、パトリキオスの着ける肩掛について	637-641.	
2	41	着るべき衣服	641	
2	42	聖使徒の神殿にある皇帝の墓について	642-649.	
2	43	勝利と戦勝をもたらした称賛されるべきストラテーゴスへの称賛の言葉	649-651.	
2	44	（レオーンの治世に生じた）・・・クレタに対する軍事行動	651-664.	
2	45	（949年に生じた）・・・クレタに対する軍事行動	664-678.	
2	46	（内外の高官に対する称号）	679	
2	47	（外国に送る文章の型）	680-686.	
2	48	（外国に送る文章の型）	686-692.	
2	49	神の友の主人レオーンの時の入場をもとにした官位ある者と役職ある者に与えられる報奨の一覧	692-696.	
2	50	神の友の主人レオーンの時の支払をもとにしたストラテーゴスとクレイスーラルコンの支払の型	696-699.	
2	51	皇帝が車と共にストラテーゴスの倉庫を見に行く際に見られるべきこと	699-701.	
2	52	皇帝の宴席の序列、及び各官位の呼称と名誉の精密な論・・・フィオテロスが作成	702-783.	
2	53	皇帝の信心のブルーマリア、即位記念、戴冠記念のための分配について	783-791.	
2	54	キュプロス主教エピファニオスの出した総主教、府主教、大主教、主教への招待状	791-798.	
2	55	パトリキオスの慣例による予算の分配について	798-806.	
2	56	マケドニア人アレクサンドロスの生涯、94章からなる歴史（的記述）	散逸	
2	57	自然学論、各々の野生動物の驚異の神に向かって上昇する習性と・・・	散逸	

月	日		名称	章	
12	25		生誕祭	2	23
1	1		聖大バシレイオス		24
1	6		神現祭	3	25·26
2	2		進堂祭		27
		-43	正教勝利の日		28
		-29	四旬節第三週日曜日		29
3	25		受胎告知		30
		-8	聖枝祭		31·32
		-4	聖大木曜日		33
		-3	聖大金曜日		34
		-2	聖大土曜日		35
		1/-1	復活祭	4	
		2	復活祭の月曜日	5	10
		3	復活祭の火曜日		11
		4	復活祭の水曜日		12·13
		5	復活祭の木曜日		14
		6	復活祭の金曜日		15
		8	復活祭後の日曜日	6	16
		25	五旬節中日の水曜日	7	17
		40	昇天祭	8	18
		50	聖霊降臨祭	9	
7	20		預言者エリアス		19
5	1		ネア献堂祭		20
10	26		聖デメトリオス		21
9	14		十字架挙栄祭		22

［表２］『儀式について』各章の主題（第１巻第１章から第３５章まで）

月	日		名称	章	
5	21		聖コンスタンティノス	6	
		聖霊降臨祭の次の日曜日	万聖人	7	
8	1		十字架の崇拝	8	
8	15		聖母就寝祭	9	
		四旬節第一週月曜日	皇帝のマンナウラでの演説	10	
		四旬節第三日曜日	十字架の崇拝	11	
		?	皇帝の沐浴	12	
		?	聖使徒教会訪問	13	1
3	9		４０殉教者	13	2
7	1		聖コスマスと聖ダミアノス	13	3
7	27		聖パンテレエモン	13	4
9	26		福音書作者聖ヨアンネス	13	5
11	1		神聖な医師達	13	6
8	29		先駆者聖ヨアンネス	13	7

［表３］『儀式について』第２巻の関連部分

月	日	名称	史料
9	8	聖母生誕祭	I.1
9	14	十字架挙栄祭	I.22
9	26	使徒ヨアンネス	II.13
10	26	聖デメトリオス	I.21
11	1	聖コスマス聖ダミアノス	II.13
11	8	大天使ミカエル	I.20
12	25	降誕祭	I.1,2,23
1	1	聖大バシレイオス	I.24
1	6	神現祭	I.1,3,25,26
2	2	進堂祭	I.27
3	9	40殉教者	II.13
4	25	受胎告知	I.1,9b,10,30
5	1	ネア献堂祭	I.20
5	21	聖コンスタンティノス	II.6
7	1	聖コスマス聖ダミアノス	II.13
7	6,12	教会和解記念日	I.36
7	20	預言者エリアス	I.19
7	27	聖パンテレエモン	II.13
8	1	十字架の提示	II.8
8	6	変容祭	I.1
8	15	聖母就寝祭	II.9
8	29	洗礼者ヨアンネス	II.13

［表４］不動暦に属する儀式

日	名称	史料
-43	正統信仰の日	I.28
-29	四旬節第三週日曜日	I.29,30,II.11.
-8	聖枝祭	I.31,32
-4	聖大木曜日	I.33
-3	聖大金曜日	I.34
-2	聖大土曜日	I.1,35
1/-1	復活祭	I.1,4,9b
2	復活祭の月曜日	I.5,10
3	復活祭の火曜日	I.11
5	復活祭の木曜日	I.14
8	復活祭の次の日曜日	I.6,16
25	五旬節中日の水曜日	I.7,17
40	昇天祭	I.8,18
50	聖霊降臨祭	I.1,9a
57	万霊人	II.7

［表５］動暦に属する儀式

月	日	名前	場所	備考	頁
12	25	生誕祭	大教会		741
1	6	神現祭	大教会		754
2	2	進堂祭	聖母：ブラケルナイ	行進	759
		謝肉祭の次の火曜日	大教会	典礼	759
		正統信仰の日	聖母：ブラケルナイ	神秘	761
3	25	受胎告知	聖母：カルコプラテイア	行進	762
		聖枝祭	聖母：ファロス-三位一体：ダフネー	行進	762
		聖大土曜日1	大教会	分配	764
		聖大土曜日2	聖母：ファロス	典礼	765
		復活祭	大教会		765
		復活祭の月曜日	聖使徒	典礼	769
		復活祭の次の日曜日	聖使徒	典礼	773
		五旬節中日の水曜日	聖モーキオス	典礼	774
		昇天祭	聖母：ペーゲー	典礼	775
		聖霊降臨祭	大教会	復活	775
5	1	ネア献堂祭	聖母：ファロス-新教会	典礼	775
5	8	福音書作者	聖ヨアンネス：ヘブドモン	典礼	776
7	20	エーリアス	聖母：ファロス-新教会	典礼	776
8	6	変容祭	大教会	行進	779
8	15	聖母就寝祭	聖母：ブラケルナイ	典礼	779
8	16	聖ディオメデス	聖ディオメデス	典礼	780
8	29	皇帝バシレイオス	聖使徒	典礼	780
9	8	聖母聖誕祭	聖母：カルコプラテイア	典礼	781
9	14	十字架挙栄祭	大教会	十字	782

［表６］『クレートロロギオン』で取り上げられている宗教儀式

月	日	名称	dc1	kl	dc2	dc3	ty	合致
9	8	聖母生誕祭		○		○	○	○
9	14	十字架挙栄祭	○	○			○	○
9	26	使徒ヨアンネス				○	○	○
10	26	聖デメトリオス	■	■	○		・	
11	1	聖コスマス聖ダミアノス				○	○	○
11	8	大天使ミカエル	■		○		○	○
12	25	降誕祭	○	○		○	○	○
1	1	聖大バシレイオス	■		○		・	
1	6	神現祭	○	○		○	○	○
2	2	進堂祭	○	○			○	○
3	9	40殉教者				○	○	○
3	25	受胎告知	○	○			○	○
5	1	ネア献堂祭	■	○	○			
5	8	使徒ヨアンネス		○			○	○
5	21	聖コンスタンティノス	■	■	■	○	○	○
7	1	聖コスマス聖ダミアノス				○	○	○
7	6,12	教会和解記念日	■	■	○			
7	20	預言者エリアス	■	○	○		○	○
7	27	聖パンテレエモン				○	○	○
8	1	十字架の提示			○			
8	6	変容祭		○		○	○	○
8	15	聖母就寝祭	○	○			○	○
8	16	聖ディオメデス		○			○	○
8	29	洗礼者ヨアンネス				○	・	
		皇帝バシレイオス	■	○				
	-62	謝肉祭の火曜日		○				
	-49	四旬節第一週月曜日			○			
	-43	正統信仰の日	○	○				
	-29	四旬節第三週日曜日	○		○		・	
	-8	聖枝祭	○	○			・	
	-4	聖大木曜日	○					
	-3	聖大金曜日	○				○	○
	-2	聖大土曜日	○	○		○	○	○
	1/-1	復活祭	○	○		○	○	○
	2	復活祭の月曜日	○	○			○	○
	3	復活祭の火曜日	○	・			・	
	5	復活祭の木曜日	○	・				
	8	復活祭の次の日曜日	・	○		○	・	
	25	五旬節中日の水曜日	○	○			・	
	40	昇天祭	○	○			・	
	50	聖霊降臨祭	○	○			○	○
	57	万霊人	■	■	○		○	○

［表７］当時の各祭日とその登場する史料

dc1：『儀式について』のミカエル３世による部分、kl：『クレートロロギオン』、dc2：『儀式について』のバシレイオス１世とレオン６世による追加部分、dc3：『儀式について』のコンスタンティノス７世による部分、ty：『テュピコン』、合致：各史料間での記述の一致

○：祭日、儀礼ともに言及、・：祭日のみに言及

月	日	名称	出発地	中継地	目的地	皇帝	総主	宮殿	行進
9	8	聖母生誕祭	ﾊｷﾞｱ･ｿﾌｨｱ	ﾌｫﾛｽ	ｶﾙｺﾌﾞﾗﾃｲｱ	○	○		○
9	14	十字架挙栄祭	-	-	ﾊｷﾞｱ･ｿﾌｨｱ	・	○		
9	26	使徒ヨアンネス	ﾊｷﾞｱ･ｿﾌｨｱ	-	ﾃﾞｨｲﾋﾞｵﾝ	・	-		○
10	26	聖デメトリオス	聖ﾍﾟﾄﾛｽ	-	聖ﾃﾞﾒﾄﾘｵｽ	○	●	●	
11	1	聖コスマス聖ダミアノス	ﾊｷﾞｱ･ｿﾌｨｱ	-	ﾀﾞﾚｲｳｰ	・	-		○
11	8	大天使ミカエル	ﾌｧﾛｽ	-	ﾈｱ	○	●	●	
1	1	聖大バシレイオス	ﾌｧﾛｽ	-	聖ﾊﾞｼﾚｲｵｽ	○	-	●	
2	2	進堂祭	ﾊｷﾞｱ･ｿﾌｨｱ	ﾌｫﾛｽ	ﾌﾞﾗｹﾙﾅｲ	・	○		○
3	9	40殉教者	-	-	青銅四面門	・	-		○
3	25	受胎告知	ﾊｷﾞｱ･ｿﾌｨｱ	ﾌｫﾛｽ	ｶﾙｺﾌﾞﾗﾃｲｱ	○	○		○
5	1	ネア献堂祭	ﾌｧﾛｽ	-	ﾈｱ	○	●	●	
5	8	使徒ヨアンネス	ﾊｷﾞｱ･ｿﾌｨｱ	ﾌｫﾛｽ	ﾍﾟﾄﾞﾓﾝ	・	-		○
5	21	聖コンスタンティノス	ﾊｷﾞｱ･ｿﾌｨｱ	聖使徒	ﾎﾞｰﾇｽ	・	○		○
7	1	聖コスマス聖ダミアノス	ﾊｷﾞｱ･ｿﾌｨｱ	ﾌｫﾛｽ	ﾊﾞｳﾘﾇｽ	・	-		○
7	6,12	教会和解記念日	ﾊｷﾞｱ･ｴｲﾚｰﾈｰ	-	ﾊｷﾞｱ･ｿﾌｨｱ	○	●		●
7	20	預言者エリアス	ﾌｧﾛｽ	-	ﾈｱ	○	●	●	
7	27	聖パンテレエモン	ﾊｷﾞｱ･ｿﾌｨｱ	ﾌｫﾛｽ	ﾀ･ﾅﾙｽｰ	・	-		○
8	15	聖母就寝祭	ﾊｷﾞｱ･ｿﾌｨｱ	ﾍﾟﾄﾘｵﾝ	ﾌﾞﾗｹﾙﾅｲ	・	○		○
8	16	聖ディオメデス	-	-	黄金門側	・	-		
8	29	洗礼者ヨアンネス	-	-	ｽﾄｩｰﾃﾞｨｵｽ	・	-		
	-43	正統信仰の日	ﾌﾞﾗｹﾙﾅｲ	-	ﾊｷﾞｱ･ｿﾌｨｱ	・	●		●
	-8	聖枝祭	ｸﾘｭｿﾄﾘｸﾘﾉｽ	-	ﾌｧﾛｽ	○	-	●	
	2	復活祭の月曜日	ﾊｷﾞｱ･ｿﾌｨｱ	ﾌｫﾛｽ	聖使徒	○	○		○
	3	復活祭の火曜日	-	-	聖ｾﾙｷﾞｵｽ	・	-		
	8	復活祭の次の日曜日	ﾊｷﾞｱ･ｿﾌｨｱ	ﾌｫﾛｽ	聖使徒	○	●		●
	25	五旬節中日の水曜日	?	?	聖ﾓｰｷｵｽ	・	●		●
	40	昇天祭	?	?	ﾍﾟｰｹﾞｰ	・	●		●
	57	万霊人	聖使徒	-	万聖人	○	○		○

［表８］教会間の行進

皇帝：皇帝の参加方法、○：行進に参加、・：行進には不参加。総主：総主教の参加、○：『儀式について』、『テュピコン』ともに参加に言及、●：『儀式について』のみ参加に言及、－：言及されず

宮殿：宮殿内で完結する儀礼。行進：史料の記述、○：『儀式について』、『テュピコン』ともに行進を記述、●：『儀式について』のみに記述。

月	日	名称	教会	献納	小聖入	大聖入	接吻	領聖	宮殿	行進
9	8	聖母生誕祭	カルコプラテイア	○	○					○
9	14	十字架挙栄祭	ハギア・ソフィア		○					
10	26	聖デメトリオス	聖デメトリオス		○				●	
11	8	大天使ミカエル	ネア	○	○				●	
12	25	降誕祭	ハギア・ソフィア	○	○	○	○	○		
1	1	聖大バシレイオス	聖バシレイオス						●	
1	6	神現祭	ハギア・ソフィア	○	○	○	○	○		
2	2	進堂祭	ブラケルナイ	○	○			○		●
3	25	受胎告知	カルコプラテイア	○	○			○		○
5	1	ネア献堂祭	ネア	○	○				●	
5	21	聖コンスタンティノス	ボーヌス		?					○
7	6,12	教会和解記念日	ハギア・ソフィア		○					●
7	20	預言者エリアス	ネア	○	○				●	
7	27	聖パンテレエモン	タ・ナルス-		○					●
8	6	変容祭	ハギア・ソフィア	?	○	○	○	○		
8	15	聖母就寝祭	ブラケルナイ	○	○			○		●
8	29	洗礼者ヨアンネス	ストゥーディオス		○					
	-43	正統信仰の日	ハギア・ソフィア		○					●
	-8	聖枝祭	ファロス	?	?	?	?	?	●	
	1/-1	復活祭	ハギア・ソフィア	○	○	○	○	○		
	2	復活祭の月曜日	聖使徒	○	○			○		○
	3	復活祭の火曜日	聖セルギオス					○		
	8	復活祭の次の日曜日	聖使徒	○	○			○		○
	25	五旬節中日の水曜日	聖モーキオス	○	○					●
	40	昇天祭	ペーゲー	○	○			○		●
	50	聖霊降臨祭	ハギア・ソフィア	?	○	○	○	○		
	57	万霊人	万聖人		?					○

［表９］各儀礼における皇帝の行動

○：参加、なし：不参加。宮殿：宮殿内で行進。行進、○：市内の行進に参加、●：小聖入のみに参加。

名称	4c.	5c.	6c.	7c.	8c.	9c.	10c.	立地
ハギア・ソフィア	創建		新築			修理	修復	
聖使徒	創建		新築			修理		
万聖人							創建	聖使徒
カルコプラテイア		創建	修復			改築		
ブラケルナイ		創建	改築					
ペーゲー			創建	修理		修復	修理	市外
聖モーキオス	創建		新築			修復		
聖セルギオス+バッコス			創建			修理		修道院
聖パンテレエモン			創建					
ストゥーディオス		創建						修道院
聖ステファノス(ダフネー)		創建						宮殿内
コンスタンティノス(フォロス)					創建			フォルム
コンスタンティノス(ボーヌス)							創建	宮殿内
ファロス						創建		宮殿内
ネア						創建		宮殿内
聖デメトリオス						創建		宮殿内
聖ペトロス						創建		宮殿内
聖バシレイオス						創建		宮殿内

［表１０］各教会の沿革

名称	平面計画	上部構造	立地
ﾊｷﾞｱ・ｿﾌｨｱ		ドーム	
聖使徒	連続十字	ドーム	
万聖人	内接十字？	ドーム？	聖使徒
ｶﾙｺﾌﾟﾗﾃｲｱ	バシリカ	ドーム	
ﾌﾞﾗｹﾙﾅｲ	バシリカ*	ドーム	
ﾍﾞｰｹﾞｰ	バシリカ	ドーム	市外
聖ﾓｰｷｵｽ	バシリカ	？	
聖ｾﾙｷﾞｵｽ+ﾊﾞｯｺｽ	八角	ドーム	修道院
聖ﾊﾟﾝﾃﾚｴﾓﾝ	？	？	
ｽﾄｩｰﾃﾞｨｵｽ	バシリカ	木造小屋組	修道院
聖ｽﾃﾌｧﾉｽ(ﾀﾞﾌﾈｰ)	？	？	宮殿内
ｺﾝｽﾀﾝﾃｨﾉｽ(ﾌｫﾛｽ)	単廊	？	フォルム
ｺﾝｽﾀﾝﾃｨﾉｽ(ﾎﾞｰﾇｽ)	？	？	宮殿内
ﾌｧﾛｽ	内接十字	ドーム	宮殿内
ﾈｱ	内接十字	ドーム	宮殿内
聖ﾃﾞﾒﾄﾘｵｽ	内接十字	ドーム	宮殿内
聖ﾍﾟﾄﾛｽ	単廊？	ドーム？	宮殿内
聖ﾊﾞｼﾚｲｵｽ	単廊?	ドーム？	宮殿内

* 正確にはトレフォイル・トランセプトを持つ

［表１１］各教会の形態

名称	位置		日数	儀式		
	１階	２階		礼拝	領聖	休憩
ﾊｷﾞｱ・ｿﾌｨｱ	南		5	ﾒｰﾀﾄｰﾘｵﾝ	至聖所	ﾒｰﾀﾄｰﾘｵﾝ
		南	2	ﾊﾟﾗｷｭﾌﾞﾃｨｺﾝ	-	ﾒｰﾀﾄｰﾘｵﾝ
聖使徒		西	2	？	移動式祭壇	ｶｰﾃﾝ内
万聖人	東？		1	ｶｰﾃﾝ内	-	聖ﾃｵﾌｧﾉ
ｶﾙｺﾌﾟﾗﾃｲｱ	北		1	ﾄﾛﾋﾟｹｰ	-	ﾄﾛﾋﾟｹｰ
		北	1	？	？	ﾒｰﾀﾄｰﾘｵﾝ
ﾌﾞﾗｹﾙﾅｲ		南	2	礼拝所	礼拝所	私室
ﾍﾞｰｹﾞｰ		西	1	？	移動式祭壇	私室
聖ﾓｰｷｵｽ		北	1	ﾊﾟﾗｷｭﾌﾞﾃｨｺﾝ	-	私室
聖ｾﾙｷﾞｵｽ+ﾊﾞｯｺｽ		南	1	ﾊﾟﾗｷｭﾌﾞﾃｨｺﾝ	礼拝所	ﾒｰﾀﾄｰﾘｵﾝ
聖ﾊﾟﾝﾃﾚｴﾓﾝ	北		1	ﾃﾄﾗｾﾛﾝ	-	-
ｽﾄｩｰﾃﾞｨｵｽ	南		1	ﾍﾞｰﾏ右	-	ﾒｰﾀﾄｰﾘｵﾝ
ｺﾝｽﾀﾝﾃｨﾉｽ(ﾎﾞｰﾇｽ)	北		1	ﾍﾞｰﾏ左	-	-
ﾈｱ	南		3	ﾌﾟﾛｾｳｶﾃﾞｨｵﾝ	-	ﾌﾟﾛｾｳｶﾃﾞｨｵﾝ
聖ﾃﾞﾒﾄﾘｵｽ	北		1	ﾃﾄﾗｾﾛﾝ	-	-

［表１２］教会内の礼拝所の使用

位置：礼拝所の位置、１階：至聖所に対してどちら側にあるか、２階：どのギャラリーにあるか。日数：年間使用日数。儀式：どのような行為に何処を使用するのか、－：記述なし、？：行為には言及あるも場所の記述なし。